

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 101

NO.101

ISSN 1346-0382

第69回 SGRAフォーラム

第7回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 「歴史大衆化」と東アジアの歴史学



第69回 SGRA フォーラム

第7回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 「歴史大衆化」と東アジアの歴史学

■ 開催の経緯

「国史たちの対話」企画は、自国の歴史を専門とする各国の研究者たちの対話・交流を目的として2016年に始まり、これまでに6回開催した。国境を越えて多くの参加者が集い、各国の国史の現状と課題や個別の実証研究を巡って議論と交流を深めてきた。第5回（2021年1月9日）及び第6回（2021年9月11日）は新型コロナ流行下でも対話を継続すべくオンライン開催を試み、議論を深めることができた。

今回は新たに「歴史大衆化」を取り上げ、問題提起と3カ国からの指定討論を皮切りに討論を豊かに展開し、これまで広がってきた参加者の輪の連帯をより一層深めることとした。

これまでと同様に円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつけた。

■ 本フォーラムの趣旨

新型コロナウイルス感染症蔓延が続くなか、「国史たちの対話」ではオンラインでのシンポジウムを開催し、一定の成功を収めてきたと考える。イベントを開催する環境にはなお大きな改善が期待しづらいことを踏まえ、引き続き従来参加してきた人々のなかでの対話を深めることを重視した企画を立てた。

大きな狙いは、各国の歴史学の現状をめぐって国史研究者たちが抱えている悩みを語り合い、各国の現状についての理解を共有し、今後の対話に活かしてゆきたい、ということである。こうした悩みは多岐にわたる。今回はその中から、各国の社会情勢の変貌、さまざまなメディア、特にインターネットの急速な発達のもとで、新たな需要に応じて歴史に関係する語りが多様な形で増殖しているが、国史の専門家たちの声が歴史に関心を持つ多くの人々に届いておらず、かつ既存の歴史学がそれに対応し切れていない、という危機意識を、具体的な論題として設定した。

共通の背景はありつつも、各国における社会の変貌のあり方により、具体的な事情は多種多様であると考えられるので、ひとまずこうした現状認識を「歴史大衆化」という言葉でくくってみた上で、各国の現状を報告していただき、それぞれの研究者が抱えている悩みや打開策を率直に語り合う場とした。

SGRAとは

関口グローバル研究会 (Sekiguchi Global Research Association/SGRA) は、良き地球市民 (Global Citizen) の実現に貢献することを目標に 2000 年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRA は日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラム等のお知らせと、世界各地からの SGRA 会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRA かわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

http://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

第7回 日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 「歴史大衆化」と東アジアの歴史学



会期 | 2022年8月6日（土）午後2時～5時（日本時間）
 方法 | オンライン
 主催 | 第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性実行委員会
 共催 | 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

第1セッション [総合司会：李 恩民（桜美林大学）]

はじめに 5

李 恩民（桜美林大学）

開会の趣旨 7

彭 浩（大阪公立大学）

【問題提起】 「歴史大衆化」について一緒に考えてみましょう 11

韓 成敏（高麗大学）

【指定討論1（中国）】 私が接触したパブリック・ヒストリー 19

鄭 潔西（温州大学）

【指定討論2（日本）】 日本で起こっていること—「歴史学」専門家の立ち位置と境界— 23

村 和明（東京大学）

【指定討論3（韓国）】 韓国における「公共歴史学」の現況と課題 27

沈 哲基（延世大学）

【コメント】 指定討論を受けて 29

韓 成敏（高麗大学）

第2セッション

[モデレーター：南 基正 (ソウル大学)]

自由討論

31

論点整理：劉 傑 (早稲田大学)

パネリスト：問題提起者、討論者、国史対話プロジェクト参加者

第3セッション

[総合司会：李 恩民 (桜美林大学)]

総括

47

三谷 博 (東京大学名誉教授)

閉会挨拶

51

趙 珖 (高麗大学名誉教授)

講師略歴 54

あとがきにかえて

金キョンテ 55

参加者リスト 58

※同時通訳

日本語⇄中国語：丁 莉 (北京大学)、宋 剛 (北京外国語大学)

日本語⇄韓国語：李 ヘリ (韓国外国語大学)、安 ヨンヒ (韓国外国語大学)

中国語⇄韓国語：金 丹実 (フリーランス)、朴 賢 (京都大学)

第1セッション

はじめに

李 恩民

桜美林大学



[原文は中国語、翻訳：于 寧（東京大学）]

韓国、中国、日本そしてほかの国や地域に住んでいる友人、仲間の皆さんこんにちは。本日は、「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」第7回目の会議へようこそ。以前本シンポジウムに参加したことのある方々、お帰りなさい。初めて参加される皆さん、歓迎いたします。これからも本シンポジウムへのご関心とご支持をよろしくお願い申し上げます。

本会議の主催者は公益財団法人渥美国際交流財団であり、以下は「渥美財団」と略します。渥美財団は長期にわたって日中韓3カ国の歴史学者を中心に、対話のプラットフォームを構築することに尽力してきました。もちろん、この対話のプラットフォームには、他の国や地域の歴史学者にもご参加いただいております。本会議は2016年に発足して以来6回の開催を果たしており、今回は7回目となります。今回の会議はテーマを「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」に設定しており、日中韓3カ国から有能な若手研究者をお招きしております。彼らは各大学の教員であり、今回の会議では講演やコメント、議論をしていただきます。全員が歴史学界での新進気鋭の若手研究者です。対等に対話できるように、これから皆さんを紹介する際は「教授」ではなく、一律に「先生」という言葉を使います。皆さんの所属については参加者リスト（p 58）をご参照ください。

会議が始まる前に、皆さんにいくつかお願いがございます。本日の会議はオンライン開催ですが、同時通訳が付きます。そのため、発言する際は、普段教室で授業を行う時より話すスピードを落として、発音もはっきりするように心がけましょう。また、発言に出てくる難しいキーワードなどは、母国語でチャット欄に入力していただければ助かります。同時通訳のほか、文字翻訳チームも待機していますので、入力していただいた内容を速やかにほかの二言語に翻訳してくれます。チャット欄に入力することが難しい場合、紙にでも書いてスクリーンに向けて皆さんに見せていただく形でも、私たちの交流がより有効になるでしょう。

本日の会議は日本と韓国時間午後2時、中国時間午後1時からスタートし、3時間余りにわたって、三つのセッションに分けて進めていきます。第1セッションでは私が司会を務め、日中韓3カ国の研究者に発表とコメントをしていただきます。第2セッションは十分な議論時間を用意した自由討論のセッションで

あり、ソウル大学の南基正先生の司会のもとで皆さんに自由に発言していただきます。第3セッションでは私が再び司会を務め、三谷先生と趙琬先生に会議の総括と全体的なコメントをしていただきます。本日の会議は以上の構成となりますが、会議が終わった後に、「懇親会」と呼ばれる簡単な意見交流会も開催します。オンライン開催ですが、自由に歓談してもらいます。懇親会は1時間を予定しておりますが、出入り自由ですので、ご興味があればぜひご参加ください。本日の会議の進行に関する説明は以上です。それでは会議を始めたいと思います。

開会の趣旨

彭浩

大阪公立大学



[原文は中国語、翻訳：于寧（東京大学）]

先生方、皆さま、こんにちは。先ほど李先生に紹介していただきました大阪公立大学経済学部教員の彭浩です。今回は実行委員会を代表して開会の趣旨を説明する機会をいただき、大変光栄に思います。皆さんをご存知のように、今回の会議は、関口グローバル研究会が主催する「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」という学術イベントの第7回目になります。今までの会議に参加したことのある方のほか、私たちのお招きに応じて初めて参加して下さった研究者も数名いますので、開会趣旨説明の機会をお借りして、今までの「国史たちの対話」企画を簡単に振り返りたいと思います。

先ほど李先生も言及されましたが、「国史たちの対話」は2016年に発足し、東アジアにおける日中韓3カ国の歴史研究者、特に国史領域の研究者間の交流を促進することを通じて、3カ国における歴史問題に対する共通認識の達成を促すことを目標にしています。このような共通認識の達成は、日中韓3カ国を長く悩ませている歴史問題の解決や、歴史認識における和解の実現に繋がると我々は考えております。

第一回の会議は北九州市で開催され、各国の国史研究領域の権威として、韓国の趙琬先生、中国の葛兆光先生、日本の三谷博先生をお招きして、国史たちの対話の可能性をめぐって、それぞれのご意見を伺いました。葛兆光先生にご提言をいただき、後の2回のシンポジウムでは、東アジア3カ国の歴史的進展に大きな影響を与えた歴史的出来事を取り上げ、第2回と第3回の会議はそれぞれ「13世紀モンゴル帝国の形成と東アジアにおける拡張」と「16世紀末豊臣秀吉政権による朝鮮侵攻」を主題に設定しました。その後、会議は近代を取り上げるようになり、第4回は「19世紀における東アジアの国際秩序」をテーマに議論を行いました。第4回の会議の開催後、新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、感染症の流行に関する問題が大いに注目されるようになり、我々もこのホットトピックを第5回の会議のテーマに設定しました。対面の交流が不可能になったため、オンライン開催を試みました。今西常務理事や事務局の三宅さん、同時通訳の先生方、そしてほかの関係者各位による万全な準備のおかげで、初めてのオンライン会議は円満な成功を収めることができました。感染症の流行に関する議論を行う中で、関連問題として人の移動が多く言及されました。人の移動は感染症の流行に深く関わっているだけでなく、現在の時事問題においても注目されていま

す。これは多くの歴史研究者が多かれ少なかれ直面する問題で、近年の歴史研究や人文社会科学の領域においても広く注目されている問題の一つでもあります。そのため、前回の第6回のシンポジウムは人の移動をテーマに設定し、「人の移動と境界・権力・民族」との関係について議論を行いました。

以上の6回の会議のテーマはすべて実行委員会の意見によって設定されたものです。今後の会議について、「国史たちの対話」に参加したことのある研究者にもテーマ設定など会議の企画に積極的に関わっていただきたく、数名の若手研究者たちにご意見を伺わせていただきました。集まった提案はどれも興味深く、議論すべきテーマばかりでした。実行委員の皆さんの意見もそれぞれで、3回にわたって時間をかけて実行委員会で議論した結果、選ばれたのが今回の会議のテーマの「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」です。このテーマを提案してくださったのはこれから発表していただく韓成敏先生です。韓先生は、現在の社会において現れてきた、一般大衆との対話という我々歴史研究者を悩ませる問題を提起してくださりました。我々歴史研究者全員がこの問題を直視すべきであり、またその解決についても積極的に考えるべきでしょう。しかし、多くの研究者は自身の専門分野の研究に没頭し、この問題に特に関心を払っていません。誠に恥ずかしいですが、私自身もその一人で、反省しなければいけません。

「国史たちの対話」プロジェクトは他の研究会と同じように学术交流を促進するほか、研究者同士が達成した共通認識をいかに社会に共有できるのかという問題を特に重視しており、これは初回から定められた本プロジェクトの基調でもあります。なぜなら、研究者同士の議論においては共通認識が達成しやすいのですが、その共通認識を専門家ではない一般の人々にも受け入れてもらうのは相当難しいことだと私たちが気づいたからです。残念なことに、それに対して、今まで我々の問題意識は主に歴史に関する書籍の執筆、特に歴史教科書の編纂にとどまっています。韓先生が提起した問題はそれを遥かに超越したと言えるでしょう。現在の社会において、歴史専門家ではない人たちが勝手気ままに無責任な歴史解説を行っていることを問題として韓先生は指摘してくださいました。この問題の多くの側面についてこれから発言する先生方が詳しい分析を行ってくださると思います。その一つは技術の問題です。ここ十年近くにおけるニューメディアの発達やインターネット時代の到来はこの問題と密接に関連しており、インターネットという公共空間において、歴史に関する学術訓練を受けたことのない多くの人々が歴史について簡単に主張を述べる場を得たのです。それに加え、様々な非主流的な新しい文化やサブカルチャーなども出現していることで、一般大衆の心理に迎合する評論はかなり需要があり、多くの領域において歴史専門家の声まで打ち消して、民衆に誤解を与えています。間違いなく、これはすでに歴史学の社会における役割を脅かす重大な問題になっており、我々歴史研究者は当然それを無視して放置してはいけません。

ただ、このような話題を議論することは簡単ではありません。歴史学においてこの問題を強いて位置づけようとするならば、これは史学史、あるいは史学理論に属する問題でしょう。私のイメージでは、今までの「国史たちの対話」の参加者は、主に特定の時代や領域に関する具体的な実証研究を行う研究者が多いと思

います。皆さんは歴史学専攻出身ですから、史学理論に関する一定の知識と教養は当然持っているはずなのですが、私のように長年にわたって具体的な歴史問題の研究に専念したことで、史学理論の発展動向、特に現在の社会問題及び歴史教育問題に関する新しい動きを十分に把握できていない人は多いでしょう。また、多くの基礎概念に対する皆さんの理解も必ずしも同じではありません。例えば、今回のテーマに「歴史大衆化」というキーワードがありますが、それを現象として理解するのか、それとも問題の解決策として理解するのか、これからの議論では意見が分かれるかもしれません。また、「公衆史学」、「パブリック・ヒストリー」、「公共歴史」などの用語が同一視できるかどうかはまだ不明でしょう。明確な共通の定義がないため、議論する中で誤解や混乱を招きやすいたらうと考えられます。それを防ぐために、これから発言する際に、ご自身による概念の表現に留意していただき、ほかの発言者の概念の表現との差異についても気を付けていただきますよう、ここで発表者と討論者の皆さんにお願いいたします。逆に言えば、共通する前提のない問題だからこそ、より議論する価値があるとも言えます。こうやって共通認識を達成することを通じて、新しい知を共有するプラットフォームを構築し、今後の交流のより一層の深化を促進していきます。これこそ「国史たちの対話」企画の趣旨と意義になります。

私による会議のテーマについての趣旨説明は以上となります。どうもありがとうございました。

「国史たちの対話」プロジェクトの経緯

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA（関口グローバル研究会）フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、まず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月の第3回アジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、まず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珖先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月、北九州に日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という

視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」と設定した。2018年8月、ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、これまで3回の国史対話を振り返って次につなげるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

第4回対話は「『東アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」というテーマで、2020年1月にフィリピンのマニラ市近郊に日本・中国・韓国から国史研究者が集まり、各国の「西洋への認識」「伝統への挑戦と創造」「国境を越えた人の移動」について論文発表と活発な議論が行われた。

第5回対話は「19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」というテーマで、コロナ禍中の2021年1月に完全オンライン形式で開催され、19世紀に感染症の問題を各国がどのように認識し、いかに対応策を用意したかを見て、さらに各国の相互協力とその限界について考えた。各国からの論文発表に加え、過去4回の参加者がパネリストとして多数参加し、活発な議論が行われた。新型コロナウイルス感染症流行により、やむを得ずオンライン開催となったものの、結果としてはWebを活用するプラットフォームを得ることになり、新たな展開につながる有意義な対話となった。

第6回対話は、アジア近現代の「人の移動と境界・権力・民族」をテーマとして、第5回に引き続きオンライン（3言語同時通訳）で行われた。塩出浩之先生（京都大学教授）は問題提起で、近現代における人の移動を左右してきた国境に焦点を当て、人の移動が国家主権体制や国際政治構造（帝国主義や冷戦）と密接にかかわる点を指摘した。その後のセッションでも議論が白熱した。やや実験的に自由討論を主体に一日を費やした構成であったが、活発な議論を進めることができたと高く評価された。

本プロジェクトは、フォーラム、セッションでの対話だけでなく、3言語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジンなどにより、円卓会議参加者のネットワーク化を図ることを目的としてスタートした。5年にわたる蓄積から、日本・中国・韓国の各国の国史研究者270人を超すネットワークとして成長している。

「歴史大衆化」について一緒に考えてみましょう

韓成敏

高麗大学



[原文は韓国語、翻訳：尹在彦（立教大学）]

こんにちは。ご紹介いただきました、韓成敏と申します。この学術会議に参加する度に、私の所属が変わるようです。事前の紹介では世宗大学になっていたのですが、今年6月1日付で、高麗大学アジア問題研究院に移籍しました。現所属は高麗大学です。

この度、テーマとして提案したのは、「歴史大衆化について一緒に考えましょう」ということです。私の発表内容は主に韓国を事例に、これまで考えてきた内容が中心となっています。ほとんどが私の同僚たちと話し合ったものです。もちろん、発表の全ての責任は私にあります。

このテーマを提案したのは、「現在の歴史学や歴史学者がどのような問題を抱えているかについて一度オープンな場で話し合しましょう」という趣旨からです。日本や中国におられる先生方も、周りの親しい先生方と一度は話したことがあるテーマではないかと思います。しかし、このようなテーマは公式な場では議論の対象にならず、歴史テーマのメディア・コンテンツの間違った内容に対し、問題があっても、私的な会話以外に、歴史学の公的な議論の場ではそれほど取り上げられてこなかったように感じます。この問題点を議論の対象にし、他国の状況はどうか、ここにおられる先生方の悩みは何かについて共に議論し、どんな対策があるか考えてみたい、ということが私の基本的な問題意識です。

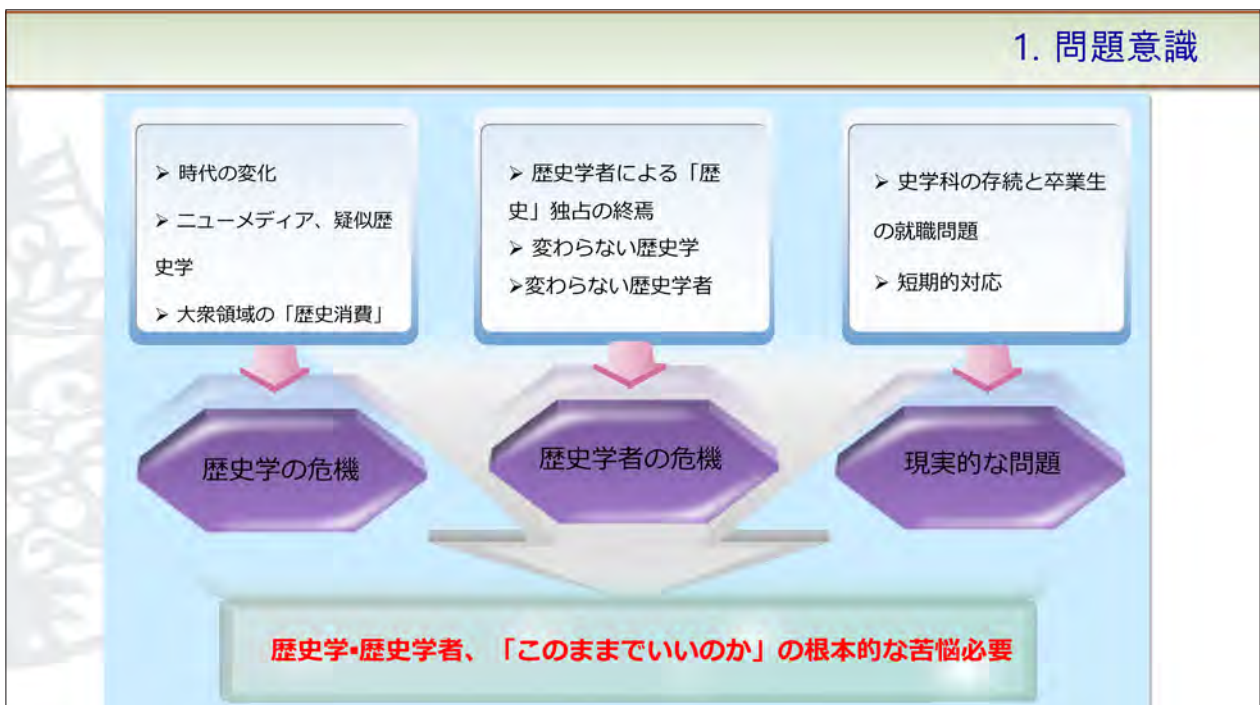
このような問題を提起する時、当然「それではあなたが考えている対策は何なのか」という問いもあるでしょう。その例の一つ対策として考えているのは、「パブリック・ヒストリー」です。韓国では正確な翻訳の意味が通じないところもありますが、普通は「公共歴史」（訳注：以下では「公共歴史」を特に説明せずそのまま訳した）と翻訳します。この公共歴史について、あえて厳密に説明しないのは、議論がそちらへ流れてしまう可能性があるため、意図的に省略しました。ただ、対策の一つとして、パブリック・ヒストリーも考え得るのではと考えています。（今回の会議の資料として）アップされている発表文を見てみると、どうやらパブリック・ヒストリーへの興味関心が多いようです。それも含めて議論できれば幸いです。私の発表はなるべく簡単に終わらせていただきます。

1. 問題意識

現在の問題意識をまず、3点ほどに絞りました（スライド1）。第一は「歴史学の危機」という側面です。第二は「歴史学者としての危機」、第三は「現実的な問題」です。歴史学の危機は、時代の変化によって新しいメディアが登場し、そのメディアに支持されている「疑似歴史学（訳注：韓国では「類似歴史学」という）」が以前に増して盛んになっています。またそれと共に正確な内容を理解できていない大衆も支持しています。大衆からの支持の背景には様々な「歴史消費への需要」があって、その需要に公式の歴史学が応えておらず、疑似歴史学がその座を占めています。

次に、歴史学者の危機は基本的に歴史のことを指す以前に、歴史学者が有していた独占の終焉を意味します。そしてこの危機に対して、「果たして歴史学はどれくらい変わったのか」、「歴史学者はどれくらい変わったのか」という二つの疑問が提起されます。多様なメディアが登場し、時代が変わりつつありますが、歴史学と歴史学者は以前と比べそれほど変わっていないということです。

時代に追いつけていないことで、現実的な問題が発生しています。最も深刻なのは「歴史学科は存続できるのか」、「学問は後継者に引き継がれていくのか」という問題であり、実際に現在歴史学科の卒業生の就職が厳しくなっています。この問題に対して一部の大学や学科では一時的な対策が立てられましたが、これはやはり短期的かつその場しのぎの対応策に過ぎなかったというのが私の判断です。ですから、現在の歴史学、歴史学者が果たしてこのままで良いのかという根本的な問題を考える必要があります。



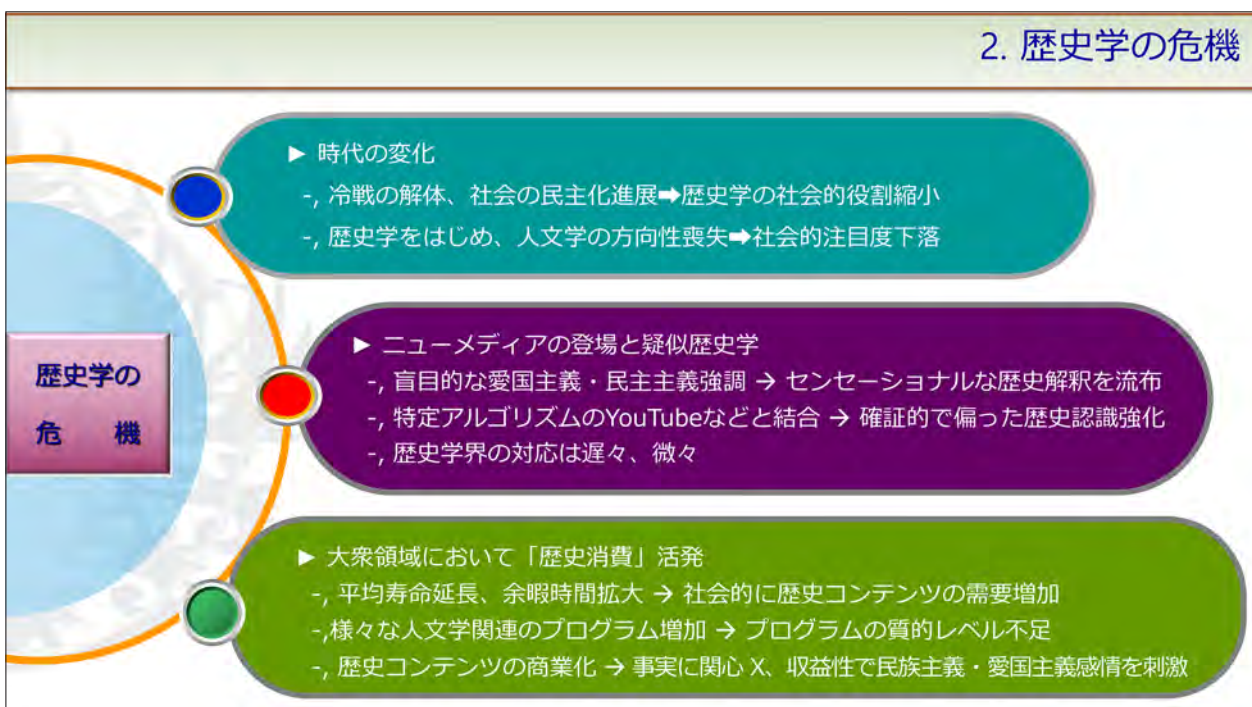
スライド 1

2. 歴史学の危機

具体的に歴史学の危機を三つに分けました（スライド2）。第一に、時代が変わったということです。冷戦状態が解消され、韓国社会の場合には民主化が進むにつれ、それ以前に社会発展の目指すべき方向性を提示してくれた歴史学の社会的役割が相当縮小されました。これは歴史学の問題だけでなく、人文学全般の問題でもあります。方向性が失われている中で、社会的注目度は下がりつつある一方で、実用的な学問、即ち「お金になる学問」への社会的注目度が高まり、この状況は経済危機が繰り返されることにより加速化しています。

第二に、ニューメディアの登場と疑似歴史学です。ニューメディアの代表としては「YouTube」を挙げることができます。YouTubeの歴史関連動画を見てみると、多くが盲目的な愛国主義、民族主義を助長する内容です。そのためか、センセーショナルな歴史解釈が流布するという問題が深刻化しています。この問題には既存メディアも寄与していると思います。韓国・中国・日本の歴史の和解を目的として我々は定期的に、学術会議を開いています。私は2020年1月から参加させていただいています。しかし、韓国・中国・日本の間の歴史解釈とは違い、影響力の大きな既存メディアやニューメディアで流される内容は各国の対立をかえって助長し、彼らの利益に合致する方向へ進んでいます。それに対して、歴史学と人文学は歯止めの役割を果たせていません。

特に、YouTubeのようなニューメディアは特定のアルゴリズムと結びついて、確証バイアスがかかった歴史認識を拡散します。大衆の関心に乗じてそれを再生産させ、特定の歴史解釈への確証バイアス的な歴史認識を強化します。とこ



スライド 2

ろが、これに対し歴史学界の対応はかなり遅く、また微弱なものにとどまっています。大衆との直接的なコミュニケーションがはばかれる雰囲気はあるかもしれませんが、学者の研究能力が論文の本数と著書という業績で評価され、大衆との接点に関しては指標がないからかもしれませんが、ほとんどの歴史学者は現状への不満を表したり、何人か集まって「このままで良いのか」という問題意識を共有したりする程度にとどまっているようです。

第三には、大衆の領域では歴史への消費が活発に行われているということです。社会全般において経済力が高まり、平均寿命も延びました。定年後にもかなりの時間的余裕があります。その結果、社会的に歴史コンテンツへの需要も増大しています。様々な分野の人文学を扱った番組や特集がメディア上で増えています。メディアだけでなく、色々な機関のプログラムも増えています。

ところが、このように増加している歴史関連コンテンツのクオリティーは相当低いものです。その代表的な例として、期間の教育を受けた博物館の案内人（ドーセント、Docent）や史跡のガイドたちがその役割を担っており、オンラインメディア上ではニューメディアがそれを担っています。彼らは不足している歴史コンテンツの中身を盲目的な愛国主義や民族意識で補い、聴衆の満足度を高める手法を用います。既存メディアや企業は歴史コンテンツの商業化を試みています。実際に需要があるから、そういう歴史的な内容を利益に結びつけようとしています。それが実際に歴史的事実として存在していたかについては関心を示していません。大衆が反応するか否かにだけ興味があります。収益レベルで民族主義と愛国主義の感情を助長するのが現在の企業やメディアの収益構造だと思えます。

3. 歴史学者の危機

さて、歴史学者たちはどうでしょう（スライド3）。基本的に歴史における歴史学者の独占時代は終焉を迎えつつあります。これまで歴史学者は歴史に関する具体的な過去への知識、解釈、史料アクセスの機会を独占していました。主たる武器は専門性です。韓国の場合、過去の史料は主に漢文になっていますが、漢文にアクセスできる一般人はそれほど多くありません。そういう専門性を武器に具体的な内容と解釈を大衆向けに発信する役割を果たしていたのですが、今はその役割が消えつつあります。

現在の韓国社会では数多くの史料が韓国語に翻訳されています。多様な政府事業、政府機関、関連した研究機関、大学のプロジェクトから非常に多くの史料が既に翻訳されており、それらはデジタル化され、データベースとしてインターネットを利用する大衆に直接供給されています。一般大衆も関心分野の史料に関してはすぐにアクセスができ、内容把握も可能になりました。その結果、歴史学者に頼らず大衆自ら歴史解釈ができる時代になっており、歴史学者の学問的な独占が消滅しているように見えます。

一方、歴史学と歴史学者はそれほど変わっていません。私がよく使う表現に

3. 歴史学者の危機

■ 歴史に対する歴史学者の独占時代終焉

- ◆ 従来の歴史学者 – 歴史知識、解釈、史料へのアクセスに対する機会を独占
- ◆ 史料の翻訳、デジタル化、DB化 → ネット利用で大衆の史料へのアクセス性増大
→ 歴史学者に依存せず、大衆自ら史料にアクセス、歴史解釈可能
- ◆ 歴史学者の学問的独占消滅

■ 変わらない歴史学、歴史学者

- 現在の歴史学者の姿は100年前とあまり変わらない
- 史料分析、論文及び著書執筆、講義
→ その他、大衆・社会に対する新しいアプローチ方法に対する苦惱微々
- 歴史学の研究成果と大衆との溝が拡大

スライド 3

「100年前と我々は何が違うか」がありますが、それほど変わっていないと思います。史料を分析して、論文と著書を執筆し講義をする、このようなあり方は、100年前と大きくは変わっていないということです。論文や著書の執筆が学者たちの主要な活動になったのはそれが初めて出現した時期に、大衆に伝達できる最も効果的な媒体が文字であり、その文字の印刷物だったからです。しかし今、大衆に伝達する媒体は他のものが効果を発揮しています。歴史学者が果たしてどれほどそれに対応しているのでしょうか。もうすでに手書きで原稿を執筆する時代は過ぎ去りました。ほとんどの歴史学者はパソコンで論文を書いたり、著書を執筆したりしているでしょう。今の私のプレゼンテーションもパソコンで行われています。

歴史学者たちはこのようなニューメディアをどれほど上手く操っているのでしょうか。かつて、文字が分からないことを「文盲」と言ったとしたら、今はパソコンを上手く活用できないことを「コン盲（訳注：パソコン+盲の合成語）」と言います。ほとんどの歴史学者のパソコンの使い方を見てみると、ワープロやデータベースの利用、ある程度使えるエクセルプログラムの使用とインターネットで情報を検索する程度にとどまっているようです。メディアを自在に活用できる能力を備えている歴史学者がどれほどいるかということ、私の周りではワープロの場合でも難しい機能に関しては使いこなせない学者がほとんどでした。

大衆と社会に対する新しいアプローチを考えるべきですが、「工夫がまだ不足しているのではないか」、「十分悩んでいるのだろうか」と感じてしまいます。ですから、歴史学及び歴史学の研究成果と、大衆との間の溝がますます深まっています。個人的な経験では、2000年代前半までは韓国で学術大会を開催すると、一般大衆も相当参加していました。ところが、次第に歴史を専攻する人たち、歴

史学者だけが主に参加する学術大会になってしまっており、これは歴史学者の孤立を意味していると思います。最近ではテーマに合う分野の学者だけが集まる学術大会が開かれています。同じ歴史学者とはいえ時代とテーマが異なると関心を示さない、専門家とはいえ、極めて狭いところの専門家になってしまいました。このように細分化が進みすぎて一つの分野に集中する研究は、多様な歴史に関わる大衆の反応や問題に対して素早い対応が困難になっている要因の一つではないかと思います。

4. 現実的な問題

また、現実問題として人口の減少があり、現在の韓国社会では平均出生率が1を割り込んでいます。0.8程度です。人口減が急激に進んでいます（スライド4）。私が大学に入った時期、韓国の大学受験生は年に100万人を超えていましたが、2022年には25万にも達していません。4分の1に縮まりました。その反面、大学の数はむしろ増えています。人口減に加え、歴史学の社会的役割が減っている状況で、歴史学科の存続、卒業生の就職などの現実問題が登場しました。大学では歴史系の授業も減っています。時間が経つにつれ、科目数が減っており、学科の定員を維持することも困難になっています。

韓国ではこういう話も聞かされます。ソウルから遠い順、つまり首都ソウルが北の方にあるので、「春に花が咲く順に大学が閉校になるだろう」という危機感が高まっています。その中でも先に廃止される学科は歴史学科や哲学科などの人文学の基礎的な学問です。学科の統廃合の優先的な対象になっているのも歴史学

4. 現実的な問題

▶ 全般的に人口減少、歴史学の社会的役割縮小
→ 史学科の存続、卒業生の就職など、現実的な問題登場

<div style="background-color: #002060; color: white; padding: 5px; font-weight: bold;">■ 史学科の存続、卒業生の就職問題</div> <ul style="list-style-type: none"> ▪ 大学において歴史科目縮小 ▪ 学科定員維持厳しい ▪ 学科統廃合の優先的対象化 ▪ 卒業生就職の困難増大 	<div style="background-color: #002060; color: white; padding: 5px; font-weight: bold;">■ 歴史関連学科の短期的対応</div> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 一部の史学科は学科名変更を試み ▶ 根本的なカリキュラムの変更 X ▶ 危機の加速化、少しの遅延に過ぎず
--	--

史学科及び学問後続世代消滅の懸念

スライド4

科です。

その結果、卒業生の就職難も深刻化しています。卒業生の厳しい現実を指す言葉としてよく使われるのが「ムンソンナムニダ（訳注：文系の「文」と申し訳ないという意味の「罪悚」の「悚」をそれぞれ取った合成語）」という表現です。「文系なので申し訳ない」という意味です。採用市場で文系出身者が歓迎されず、歴史学科の出身者はさらに歓迎されていません。この問題に対して、学生の面倒を見る立場からどうすればよいか、考えなければならないと思います。

それなりにこの問題に対応しようとした韓国の一部の大学では歴史学科の学科名変更を試みました。名称変更には社会的需要があったと認識した学科から先に名称を「歴史文化学科」もしくは「歴史コンテンツ学科」のようなものに変更しました。しかし、根本的どころでのカリキュラムの変更はありませんでした。関連科目を1、2コマ追加しただけで、実際の内容は既存のものとは変わっていませんでした。歴史とコンテンツ、歴史と文化を同時に学べる統合的かつ学際的な構成にはなり得なかったため、これは危機の加速化を少々遅らせたに過ぎませんし、根本的な対策にもなり得ないと思います。現在は次世代の歴史学科と学問の消滅を懸念すべき状況だと思います。もちろんこれは韓国の状況です。

5. では、対策は……？

韓国史、韓国社会では社会変革運動、民主化運動もしくは学生運動が激しかった1980年代に「歴史大衆化」という用語がありました。歴史大衆化は「社会発展に対する歴史認識を大衆に普及する」という意味合いが大きかったのです。と

5. では、対策は…？

◆ 「『歴史大衆化』表現」の問題

- ❖ 韓國的脈絡で使っていた「歴史大衆化」用語の使用 → 批判が多い
- ❖ 「歴史大衆化」の意味 → 「大衆が読みやすく書いた歴史、大衆に興味を持たせる歴史に転換」を意味
- ❖ 一種の大衆啓蒙に近い概念
→ 「大衆の無知」、「歴史認識と歴史叙述に対する歴史学者の独占的権威が前提」

◆ 一つの対策として「Public History」

- ❖ 発表者が提起した「歴史大衆化」は、実際は「Public History」に近い
→ 韓国では「公共歴史」、日本では「パブリック ヒストリー」、中国では「公衆史学」と翻訳
- ❖ 「Public History」の概念及び主な内容は国ごとにより異なる → 主な内容省略
- ❖ 歴史学は、自らの存在意義証明の時期 → 歴史学はどのように対応すべきか？

スライド 5

ころが、当時は当然のように使われていたこの用語が、1990年代以来、かなり批判を受けました（スライド5）。歴史大衆化の意味は「大衆に読みやすく書かれた歴史」もしくは「大衆の興味のある歴史への転換」、「内容を分かりやすく、興味深く読み解いてくれる」ということで、これは「大衆を無視する大衆啓蒙に近い概念」であると言った批判が提起されました。大衆歴史をわかりやすく興味深く読み解いてくれるというのは、「大衆の無知」を前提にし、歴史認識とその叙述に対する歴史学者の独占的な権威を前提にしているというのが批判の根拠でした。

これはある程度妥当でしょうが、「それでも私はわかりやすく興味深く書くことの何が問題なのか」とも思います。専門用語など、難しい用語を使い続ける論文や著書が大衆受けしないのも事実だからです。ですから、私はもう一つの対策として、そしてこのような歴史学の問題を解決するための対策として、「パブリック・ヒストリー」を提案します。80年代の韓国での歴史大衆化の問題は実際にはパブリック・ヒストリーの一部分に近いのです。ですから、パブリック・ヒストリーを韓国では「公共歴史」、日本では「パブリック・ヒストリー」、中国では「公衆歴史」というのですが、パブリック・ヒストリーの概念と中身は国ごとに非常に異なっています。ですからその中身については割愛させていただきました。議論の焦点を現在の歴史学の危機、歴史学者の危機に当てたかったからです。

現在の歴史学は存在意義を自らが証明しなければならない時期に来ています。このような問題に我々はどう対応すべきか、反歴史主義、そして歴史における歪曲もしくは民族主義的かつ愛国主義的な、つまり扇動的な歴史解釈についてどのように解釈すべきか、ここにおられる日本と中国の先生方はどのように感じていらっしゃるか、そしてこの問題を解決すべきだとしたらどのような対策があるか、ざっくばらんに議論したい、というのが私の考えです。

発表はこれで終わりにします。ありがとうございました。



私が接触した パブリック・ヒストリー

鄭 潔西

温州大学

[原文は中国語、翻訳：陳 璐（早稲田大学）]

渥美国際交流財団から連絡がありました。私の古巣（元所属先）である寧波大学のパブリック・ヒストリーの状況について話してほしいという依頼でした。

私は主に明代の行政公文書を解読し、文献資料に基づいた歴史研究をしている研究者です。パブリック・ヒストリー研究については素人のようなもので、実は発言権がないのですが、要望が来た為、無理矢理ながら少しばかり自分の粗雑な見解を述べさせていただきます。

寧波大学のパブリック・ヒストリー研究は、錢茂偉教授によって創始されました。錢教授は中国歴史学史の出身で、もともとは明代歴史学史を専門としており、主に古籍書物の整理、科挙史、史学著作などの関連分野の研究に従事してきました。錢教授は、その後の教育研究活動において、パブリック・ヒストリーに興味を持ち、その理論的・実践的研究を重ね、この分野で大きな成果を収めました。現在、中国国家社会科学基金の大型プロジェクト「現代中国におけるパブリック・ヒストリー記録の理論と実践に関する研究」を担当し、中国におけるパブリック・ヒストリー研究分野の代表的人物になっています。寧波大学のパブリック・ヒストリーの研究は歴史学者に限らず、学部生や大学院生も多く参加し始めたことで、「口述歴史（オーラルヒストリー）」が学生たちにとって最も力を入れている分野の一つとなってきました。参加者全員が歴史の主演となり、学部生も「太史公」（訳者注：中国前漢時代の官職。国史の編纂や暦の制定などにあたった）となるのが、寧波大学パブリック・ヒストリー研究の重要な特徴です。

私の知る限り、パブリック・ヒストリーがうまくいっているケースが二つあります。一つは中国の最後の皇帝溥儀が書いた『私の前半生』で、もう一つは近代中国における二人半の外交家¹の「半」として知られている外交家顧維鈞の作品『顧維鈞回顧録』です。前者は、溥儀が東北撫順戦犯管理所で服役していた際に、自ら口述した自伝的懺悔文で、後に出版社の支援を受けて完成し、正式に出

1 （訳者注）中国の外交官では、周恩来、李鴻章のほか、顧維鈞がよく知られているが、顧維鈞は決定権を持たなかったため、通説では半分の外交官と評価され、周恩来と李鴻章と共に、近代中国二人半の外交家と呼ばれている。

版されたものです。一方、後者の回顧録は、顧維鈞がコロンビア大学の「口述歴史プロジェクト」を受けて出来上がったハイレベルな作品です。顧維鈞本人の口述のほか、日記、会議録、書簡、電信文書などが大量に用いられ、17年がかりで編纂されたのがこの回顧録です。二人とも歴史学者ではなく、溥儀は「中国の最後の皇帝」で、顧維鈞は外交官です。後者は国内外の政治・外交の大きな出来事を数多く経験した証人でもあります。彼は「口述歴史」という方法を通して、彼らが生きた時代の歴史、人物、出来事を復元し、外部の人間にはあまり知られていなかった多くの歴史的背景や内幕を明らかにしてくれました。これは、中国近代歴史における重要な一次資料で、学界に大きな影響を与えています。しかし、この二つのパブリック・ヒストリーは「口述」に限らず、他の多くの文献資料にも裏付けられており、高い厳密性を持っています。

私は寧波大学の「パブリック・ヒストリー研究プロジェクト」には参加しませんでした。いくつかのパブリック・ヒストリー活動に参加したことがあります。歴史に接する人は、多かれ少なかれ自分の家族の歴史に興味を持っています。私もその一人で、自分の家族の歴史を掘り起こし、整理することに時間を費やしてきました。わが家はもともと代々読書の家で、文字記録を重視してきましたが、近代以後の戦争や1949年以降に起こったいくつかの政治運動により、その文化がほとんど途切れてしまい（家財が没収され、教育権も奪われた）、文書の散逸もかなり深刻でした。現在残っているのは、私の曾祖父の祖父、叔父の詩集と文集が一冊ずつしかありません。それらも偶然手に入った書物で、それ以外は参考になる家譜や簡単な伝記が多少あるぐらいです。私の曾祖父は90代まで生きたので、村や町の高齢者の多くは彼のことを知っていました。そのため、私はその人たちにインタビューし、「公衆」に「歴史学」に参加してもらったことで、曾祖父が経験した歴史の一部を取り返すことができました。このように考えると、わが家はパブリック・ヒストリーの受益者であるとも言えます。ただ、残念なのは、記憶には時間的制約があるため、それ以上さかのぼるのは難しいということです。

私がパブリック・ヒストリーに接する過程でいくつかの問題も出てきました。第一に、信憑性の問題です。周知のように、歴史学的な記述の重要な原則の一つは「真実性を徹底する」ことであり、伝統的な歴史学は歴史家に高い素質を要求するものです。それに対し、パブリック・ヒストリーの参加者は、伝統的な意味での歴史学者でもよいし、歴史学の素養のない素人でもよいので、レベルがバラバラな参加者が混在しています。彼らの語った「歴史」の信憑性は、その人の素養に大きく左右されます。インタビューを受けた人の中には、その人が他人に伝えたいこと、もしくは他人に伝えられることのみを語り、それ以外の情報を意識的に口から出さないようにする人もいます。また、歴史の主演としての口述者の多くは、必ずしも学問的・道徳的な良心を備えているとは限らず、思い切り誇張して語る人も多く、その歴史記述は時に常軌を逸しています。利害関係にかかわる歴史的情報の多くは、このように巧みに移植され、接ぎ木され、白黒反転されてしまいます。文化大革命の「英雄的戦士」である劉世保事件はその典型的な例です。パブリック・ヒストリーがこれほど盛んに行われている現在において

も、伝統的な歴史研究手法は依然として併用する必要があり、歴史学者が歴史客観性の原則をできる限り守るべきです。

第二は、倫理に関する問題です。近年、私は1920年代から30年代にかけて浙江省にある山間部の町に住んでいた労働者グループを研究しています。このグループは日本への出稼ぎをしていた人たちで、合計200人余りいます。全員がもう生きていません。現在、最も包括的な資料は1984年に行われた全県の華僑インタビューの記録のみです。私はその資料に基づき、多くの地元の人々にインタビューしたところ、日本への出稼ぎをしたこの労働者たちが1930年代に多くの日本人女性を連れて山に帰ってきたという特殊な現象を発見することができました。この地元の人たちは、最近徐州で起きた女性人身売買事件のように、彼女たちは「誘拐」されて来た人だと考えています。さらに追跡調査をしたおかげで、この日本人女性たちの中の一人の孫娘と連絡が取れました。この孫娘は現在日本に住んでおり、彼女によると、祖母は20代頃中国に来ており、浙江省の山中で40年間暮らし、二人の山人と結婚しました。1972年の中日国交正常化後帰国できるようになり、子供や孫たちを日本に連れて帰り、日本でさらに30年近く暮らし、十数年前に百歳近くで他界しました。孫娘の回想によると、祖母は頭脳明晰で素養も非常に高かったが、自分の過去については何も語らず、家族も祖母の若い頃のことについてはほとんど知りません。1984年のインタビュー記録にも彼女に関する情報は見つかりません。このケースに参加できる「公衆」は少なくありませんが、得られる情報は比較的少ないのです。根本的な原因は、この女性の「公の歴史」に参加する意欲が非常に低いことにあります。無論、中日両国の文書を調べたり、関係者をインタビューしたりして、この日本人女性の過去をできるだけ復元することはできますが、このように歴史を掘り起こして公開する行為は、彼女およびその家族にとって何らかの形で害を及ぼす可能性があるため、事前に倫理的配慮が必要です。

第三の問題は、研究価値の問題です。私はインタビューする際に、学歴が低く、話の論理性に欠け、人生のストーリーも代表的ではない人たちにも出会ったことがあります。その場合、インタビューから得られるものは、大体その日常生活しかありません。こうした内容は非常にリアルですが、あまり意味がなく、たとえインタビュー回数や情報が増えても、歴史的な価値に欠けています。「パブリック・ヒストリー研究」の発展によって、歴史研究の対象が広がり、「太史公」役を担っている人やグループに対する要求水準も下げられたとはいえ、研究の価値という点において、我々は基本的な追求を徹底すべきであり、できる限り代表的で独自性のある質の高い歴史研究成果を作り、低レベル歴史記述のゴミの繰り返しや増加生産を避ける必要があります。

最後に、少し現実的なことについて話します。歴史学は伝統的な学問であるため、中国で廃止される確率はそれほど高くありませんが、相対的に冷遇されているため、ポストの空きが少なく、就職の見通しは理想的とは言えません。博士号取得者であっても、望ましい仕事を見つけることは困難です。大学によって、歴史学専攻の学生募集数を減らしたり、歴史学の基礎理論を学ぶカリキュラムを短くしたりすることがあるため、歴史学の卒業生が歴史的知識に乏しいという奇妙

な現象が起きています。新型コロナウイルスが勃発した後、歴史学専攻の卒業生の就職率は低下傾向にあります。私の指導で、今年の前半に卒業した大学院生がいますが、彼女のクラス22名のうち、半分の人が就職先未定です。彼らは中学校・高校の歴史の教員や国家公務員や公的事業部門を目指しています。なぜなら、これらの機関は政府によって財政的に支援され、経済的に安定しているからです。一方、コロナ禍以来、他の仕事はこうした保障が難しい状況にあります。現在の若者たち全員が上記の体制に入ることを望んでおり、歴史学の学生（学部生、修士と博士）も例外ではありません。この状況は現在の中国にある社会問題を反映しているように思います。

ご清聴ありがとうございました。



日本で起こっていること

—「歴史学」専門家の立ち位置と境界—

村 和明

東京大学

東京大学の村と申します。今日のテーマは非常に重要な問題ですので、たくさんお話をしたいことがありまして、事前にお配りした資料にはかなりたくさんの内容を簡単に詰め込んであります。わかりづらいところがあればあとで質問していただきたいですし、また、日本の事情がわかる方には、後半の議論でいろいろ補足していただきたいと思います。

私自身はこの問題をとくに追究したり、自分で活動したりということはあまりしておりませんでした。そのために今日お話することはふだん私の視界に入る、私の目に見えることということになります。

まず韓成敏先生がお話くださった、今韓国で起こっている現象とその問題点。これは非常に日本とよく似ている、ほとんどの点で同じだと思いました。また韓先生の問題意識、何が課題かという考えも非常に共感するところが多かったです。

今から私がお話しするのは、大きく分けて二つのことです。ひとつは「日本で起こっていること」で、韓国とは少し違うかもしれないことです。日本と韓国でおそらく同じことが起こっているという話はあまりいたしません。もうひとつは、このあとの討論の時間でほかの皆さんの意見をぜひ聞きたい、議論したいという点です。この二つ目はさらに四つぐらいに分けて考えるつもりです。

まず、「日本で起こっていること」ですが、この問題に関心を持っている研究者は広く存在していて、ふだんの会話にもよく出てくるのですが、集団的な議論であるとか集団的な活動というものは限られていると思います。お配りした資料に、私の知っている身近な活動の例として、“地域の史料の調査・研究における共働は数十年試みられている”ことを挙げましたが、詳しい説明は省略します。ただ、関心を持っている研究者が広くいると書いたんですが、本日参加者に日本人の名前があまりないのでちょっと今自信がなくなっています。

「歴史学」と「歴史学の専門家集団」というものに、さらに国家・社会から求められている「歴史」（サブカルチャーも含む）を加えて考えると、日本では「歴史学」は主に大学の専門家の集団が担っていて、高校の先生やアマチュアの

郷土の歴史を研究する人も加わっていましたが、後者は激減していて、主に大学にいる専門的な研究者がすごく孤立しています。

これはお話をうかがっていて韓国と違うと思ったんですが、大きな歴史を考えたとき、日本では歴史学とか歴史家の専門集団が独占していた時期はほとんどないような気がいたします。

人々が好むような大きな歴史についてのインフルエンサーは、他の分野の専門研究者（自称専門家も含みます）やジャーナリストが多い。歴史学の専門家であるインフルエンサーはほとんどいません。少ないうえに、彼らに対する他の研究者からの視線は厳しいです。大衆に迎合していると見られがちです。逆に影響力が大きいのは、この2世紀でいえば作家ですね。頼山陽、吉川英治、司馬遼太郎などの物語的な歴史を書く作家です。彼らの影響力がものすごく大きかったと思いますが、近年は少し目立たなくなっているように思います。

コンテンツに目を移してみましょう。人気のある歴史のコンテンツの特徴は何か。いろいろ挙げられますが、確かに愛国主義がある。愛国主義の中身もいろいろあるのですが、非常に単純にいうと、善と悪を決めてしまうもの、例えば日本は善でロシアは悪とか、この政党は善でこの政党は悪とか、非常に単純な「政治的な善悪二元論」ですね。

それから英雄主義的である、立志伝的（成功の秘訣を語る）である、感傷的・情緒的、トリビア的・小咄（オチのある短いエピソード）的といろいろありますが、これらの特徴は庶民の娯楽であることです。庶民というとちょっと偉そうですが、多くの働く人々の娯楽ですね。これはおそらく演劇・小説・映画・テレビドラマといった形で、数世紀に及ぶ伝統があるものにつながっている内容です。

ところがその一部が近年（韓先生は「疑似歴史」とおっしゃいましたが、非常によくわかります）、「疑似科学」的な外形を装い始めて、専門家との境界が非常に曖昧になっていると思います。

成長しているコンテンツの対象とか媒体を見ますと、web上の短いものです。YouTubeは確かに日本でも非常に影響力がありますが、YouTube上の非常に短いコンテンツですね。あとは、これも韓国と似ていると思いましたが、定年で退職したおじいさん、おばあさんたちを対象とするもののがかなり多いのです。さらに、これは韓国とは違うかもしれませんが、日本の場合は長時間労働、低賃金、みんな疲れていて不安と不満でいっぱいであること。これがコンテンツの需要の背景にあると感じています。

次は専門家の集団の話ですが、日本では歴史学は主に文学部といわれる学部が中心なのですが、ほかにもたくさんの学部のなかに歴史学を学ぶコースが、以前はあちこちにあったのです。ところがこれが今なくなっています。文学部以外の学部で歴史を勉強することが全然できない。文学部自体も韓国と同じで、名前が変わったり、人数が減ったりということが続いています。

情報のデジタル化は進んでいます。ただし日本では歴史関係の資料や研究書の公開は、正直遅いと思っています。やや救いがあるのは、これは本の世界に過ぎませんが、新書などの薄くて読みやすい簡単な本を専門家が書いて、何万部か売れるというような活動は盛んです。現在は少しそういう本が増えているので、現

実的な希望かなと思っています。

以下は、このあとぜひ議論したい、皆さんの意見を聞きたいポイントを四つほど挙げました。

一つ目は、この問題は歴史学だけの問題では、おそらくないと思います。もう少し広い枠組みで考えるべき問題で、そのなかで歴史学が考えるべき問題と、両方とも考えたいということです。

まず「歴史学を越えて」というところで考えると、知識というものの体系が全体に激変していて、学問や専門家の権威というものが、全世界的に動揺しています。研究以外の目的を持っている「疑似科学」が非常に広まっています。日本では国家の権威を背景とした大学の権威、あるいは大学や大きな出版社を背景にした「知識人」（この言葉もほとんど死語です）の権威、これが現在ほとんど崩壊しているというか、むしろいまは敵視されていて、大学の専門家や知識人だということ、インターネットのなかで敵視される（反エリート主義）という傾向があります。

歴史学に限って考えると、歴史というもの（大きな歴史も含みます）は、感情に訴えるし、世界を説明しますし、誰でも何かを語れますから、学問的ではない言説が広く存在し得ます。これは歴史の特徴だと思いますが、語られている内容が学術的であるかどうかは専門家以外にはほとんど判別ができないところがあると思います。

内容よりも形式、つまり話している人間の肩書きだとか話している光景で判断される。それから政治的・経済的な利用価値が非常に高いので、その影響を受けやすい。消費の対象にもなるし、政治的なプロパガンダの主眼としても非常に有効ですね。

二つ目です。こういう問題をなるべく歴史学の方法で考えたいのです。今日は歴史研究者が集まって悩みを語り合う場だと思っていますが、一方で歴史学の方法で考える必要があって、歴史学の専門とは別に大衆化があるとは考えずにこの問題を捉えることで、歴史学自体が発展して深まっていくことを目指したいと考えます。

理論と研究対象の例を簡単に挙げたいと思います。「歴史学」は、紙に印刷した論文・書物などの研究成果、あるいは少人数で口頭で話すような閉鎖的な場で議論が進んでいて、広く社会に啓蒙・普及的な発信をすることは控えられています。日本の歴史学は伝統的にこういうところがありますが、これを自覚して長所と短所を考えるべきだと思います。もちろん短所だけではない、長所も考えるべきで、それから今後の方向性を模索したいと考えます。

研究対象として考えると、「個人が情報を集めて世界をどう認識しているのか」といった仕組み」、または「ある言説が何かの権威を帯びて影響力を持つというのはいったいどういう仕組みなのか」、「専門家集団・専門的知識と国家や社会はどう関係しているのか」、「社会の分断と統合はどうなっていたのか」。こういう研究を改めてする必要があるし、視点も新しくして進めていく必要があると思います。

三つ目です。ここは専門家集団といえる人々が集まっていると思いますが、歴

史学は変わっていく、変わらなければいけない、変わるべき方向を考えないといけないわけですが、同時に変わってはいけない方向、変わってはいけない面も考えなければいけないと思います。生き残っていくことと、学問的な矜持をどう両立するのか。どこでどうバランスをとるのかという問題は非常に大きいと思います。

大切にしたいことを少し書きましたが、「一見地味な事実の解明・蓄積にこだわること、事実や根拠をもとに議論すること、情報の信憑性を慎重に測ること、結論や評価を急がないこと、根拠となる情報の保存に務めること」。例えばこういう価値は大切にしたいと考えています。今の社会はこの逆の方向にいていると思うのです。そういう点については社会の変化に合わせてはいけないと思います。

こういう価値観を持つ人間はおそらくこれからもいるでしょうから、そういう人々が集まる場所として、いかに共同体を存続させていくかを考えたいと思います。

最後ですが、変わり方を模索するときには、我々を取り巻いている社会がどう変わっていくのかということはどう見通すのか、ということと不可分だと思っています。以下は私の感覚に過ぎませんが、今の社会は情報の量が爆発的に増えすぎていて、何に信頼がおけるのかわからなくなっている。情報をめぐる秩序とか体制というものが、よくわからなくなっていて、秩序がもう一度できあがろうとしている過程だと思います。出来上がる新しい秩序がどういうものか、私にはよくわかりません。見えません。おそらくプラットフォーム企業が重要で、日本でもYouTubeとかツイッターとかYahoo!の影響が非常に大きいわけですね。あとは人工知能（AI）。それから国家が民意を調達する方法と書きましたが、例えば選挙制度が変われば、政治と歴史の関係が変わると思うのです。そういう意味です。これが非常に重要だと思いますが、どう社会が変わっていくのかわからない。そうすると歴史学がどう変わっていくべきかもかなり難しい問題だと思っています。

以上です。ありがとうございました。



韓国における 「公共歴史学」の 現況と課題

沈 哲基

延世大学

[原文は韓国語、翻訳：尹在彦（立教大学）]

こんにちは。ご紹介いただきました、沈哲基と申します。歴史大衆化というテーマで韓先生に対する討論コメントとして文章を作成しましたが、皆さんと一緒に考えたいという内容を中心にまとめました。文章を読みながら進めさせていただきます。

「歴史の大衆化」というテーマは韓国の歴史学界で長らく話し合われてきたテーマでした。「歴史を少数の歴史家たちの独占物にせず大衆と共にする」ということでした。それが「歴史の消費」として表れ、博物館もしくは記念館等で専門家を招待し行われる多様なプログラムが企画されました。しかし、そういう博物館、記念館のイベントは専門家を招いた一回きりのプログラムが大半でした。そのため、博物館、記念館は常設企画のために他の方法を模索し、それが短期間で養成された案内人（ドーセント、Docent）、ガイドによるプログラムです。

このプログラムに対しては肯定的な反応もありませんでしたが、副作用も少なくありませんでした。学生や一般人向けのプログラムがほとんどで、韓先生がお話しされたように、乏しい中身を、聴衆に対する扇情的かつ過度な民族主義の観点、もしくは愛国心を煽ることで補おうとしていたのです。専門的な歴史の内容を客観的に語るより、自らが説明できないところを少なからず民族的な感情に訴えながら煽情的に語り、不足しているところは飛ばしていきました。その結果、それを受け入れた人々、一般大衆の間で誤解を招くこともありました。

また、歴史消費の側面から注目されるのが歴史コンテンツです。歴史を大衆に普及させ、たやすくアクセスできるという点からは肯定的な面もあります。しかし、韓先生のご指摘のように、これも興味本位で行われたため、正しくない事実が伝達され、行き過ぎた民族主義、愛国主義に結びつくこともありました。韓国ではバラエティー番組で歴史をテーマに制作されたものもありました。出演者の講師の何人かが問題になることもありました。

このような問題に対し、歴史学界は問題提起を続けてきました。しかし、解決のための対策を提示できていませんでした。最近では公共歴史、パブリック・ヒス

トリーをその対策として提示しています。韓先生が指摘された、歴史学の危機、歴史学科の存続、卒業生の就職のような現実問題への対策としても認識されています。韓国の学界では危機への対策として議論されるようになったばかりです。つまり、歴史学を「アカデミーの歴史」と「パブリック・ヒストリー、公共歴史」に区別し、「それぞれ学問的領域と大衆的領域で展開していこう」ということです。大学を中心としてアカデミックな歴史学を進め、一方では一般大衆を相手にする公共歴史を分けてみようじゃないかということが話し合われています。

ところが、韓国の歴史学界、韓国社会ではまだ公共歴史学への明確な概念整理ができていないと思います。公共歴史学を歴史学の危機の対策として提示するためには、公共歴史学に対する明確な概念整理が必要だと考えます。韓先生の提案文にもそういう点に対する認識は示されています。ただし、提案文では具体的には述べられていないので、韓先生のお考えとして韓国での公共歴史学の概念、その中身についてお話いただければありがたいです。また同様に日本と中国で考えられる公共歴史学の概念についてもご教示をお願い致します。そうすることによって、我々が一緒にコミュニケーションできる土台が提示されるだろうと思います。

公共歴史学への概念整理は、既存の歴史学界における認識の転換と歴史学が置かれている困難な状況を克服するための対策も提示してくれるだろうと思います。ということで、歴史学者と公共歴史学の分野で活動している学芸員や作家、教師をこれからは「公共歴史家」と呼ぶようにします。彼らとの関係をどのようにしていくかが非常に重要だと思います。繰り返しになりますが、アカデミックな歴史をやっている学者たちと、これを基に講義を行う学芸員、文章を書く作家のような人々との関係をどのようにするかが非常に重要です。歴史学者が考える公共歴史、公共歴史家が考える公共歴史に対する理解が求められ、共通の認識を探ることは今後公共歴史を定着させていく中で欠かせない点だと思います。これに対する韓先生及び他の先生方のお考えをお伺いしたいです。

公共歴史家への再教育も必要です。韓先生も公共歴史家への再教育が必要と考えておられるのであれば、彼らへの体系的教育のために推し進めるべき中核の事業は何かについて、ご意見をお聞かせください。学芸員、教師、作家が歴史学への再教育を受けないと、最新の研究動向や議論に追いつけないかもしれませし、大衆にも正しく伝わらないかもしれないので、再教育は必要になります。それをどのような体系で行うべきか、お話を伺いたいです。

最後に、公共歴史がヨーロッパや米国では学問領域で語られているようです。ですから、「公共歴史学」という存在の実態が欧米では見えてきているようです。これから公共歴史が学問として公共歴史学になり得るか、その場合には歴史学、公共歴史学、公共歴史はどのように区分すれば良いかについてご意見をお聞かせください。そして先ほど申し上げたことの延長線上で、これからは「歴史学としての公共歴史学」も成り立つとしたら、大学でも公共歴史学を学問として研究し教育できるかについてお聞きしたいです。

あと少し時間が残っているのですが、このあたりで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

指定討論を受けて

韓成敏

高麗大学

[原文は韓国語、翻訳：尹在彦（立教大学）]

三人の先生方、ありがとうございました。やはり先生方のご質問は、公共歴史についてのものが多かったようです。まず中国の鄭先生からはご本人の事例と事例研究を中心として、最後に「公共歴史を果たして信じて良いか」、「大衆に歴史を任せて良いか」というご質問をいただきました。

しかし、大衆を歴史家として想定すること自体が公共歴史ではありません。これに関しては、村先生のご質問とも結びつきますが、歴史学への矜持からそこで守るべきことがあるという趣旨に関しては私も同感です。基本的に歴史において我々が扱うべき内容、史料への批判・保存、そして如何なる結論を出すべきかに対するバランスの取れた考察と工夫、これは歴史学の原則と言うべきところです。そういった原則を変えてしまったら、それは歴史学ではないでしょう。歴史学の原則を守りつつも、歴史学が現在の時代に合うように変化していくべきでは、というのが私の問題意識です。

公共歴史に関する具体的なご質問を沈先生よりいただきました。概ね五つほどのご質問で、第一に、公共歴史の概念に関してです。公共歴史の概念は非常に多種多様です。専門的な公共歴史は米国で始まったと見るべきで、米国では歴史学科出身者の就職問題を中心として、公共歴史学が始動しました。その反面、オーストラリアの場合、既存の大学の歴史学への反発、即ち既得権を持つ歴史学に対する批判を中心として公共歴史学が発達しました。ヨーロッパの主要国、フランスでは国家のプログラムとして公共歴史が進められ、オーストリアや他の国では大衆がクラウドソーシングを中心に資料を集め簡単な説明をすることで公共歴史学が進められました。国によってその意味はかなり異なります。

ただし、私は公共歴史、パブリック・ヒストリーは歴史コンテンツを用いて大衆とコミュニケーションを取りながら進められるもの全てが公共歴史学ではないかと思います。そこには大衆向け講演等の非常に消極的な公共歴史学もあれば、大衆が直接参加できるプロジェクト等の積極的な形の公共歴史学もあるでしょう。

第二には、歴史学者と公共歴史の分野で活動する学芸員、作家、教師とがどのような関係を持つかについてです。私は、「歴史学の中間層」が薄いと感じています。社会的需要があり、その裾野が広がるためには、その中間に媒介の役割を果たす人々が必要になります。ところが、自らの歴史コンテンツを持って、直接大衆に接する代表的な存在が教師の方々です。彼らは学部で専門的に歴史学を学んだ人々で教員資格も持っています。

音楽の場合、韓国社会では直接楽器を扱って集中的に音楽を学ぶ最初の体験は、プライベートの音楽教室ですることになります。音楽教室でピアノやバイオリンを習う場合、その先生は学校教師ではありません。しかし、これらの方々を音楽家ではないとも言えません。それでも、専門的な音楽家ということも難しいです。もちろん、全く音楽ではない音楽からかけ離れた教育を行うわけでもありません。

このような方々が数多く存在することで、音楽の裾野が広がり、教育を受けた生徒の中では専門的な音楽家が誕生したり、趣味として音楽を続けたりすることもあるでしょう。多様な形で大衆と直接コミュニケーションを取れる人々へコンテンツを提供し、専門性を育て続けてくれるのは、歴史学者だということです。歴史学者ももちろん公共歴史家になり得ます。米国で規定される公共歴史学とは、学校の外で起きる全ての歴史と関わる過程を指します。学校で学生を教える時には大学教授であっても、外で大衆向け講演をしたり、大衆に対し歴史的な解説をしたりする時は、その歴史家は公共歴史家だと言えます。公共歴史学を歴史学と対峙する概念として取られては困ります。専門的に大衆に接することができる、大衆向けの歴史家を養成したり、大衆の歴史的教養を高めたりすることが、公共歴史学の概念だと考えるべきではないでしょうか。

こういった公共歴史、大衆に直接接する案内人（ドーセント、Docent）、ガイドへの再教育は欠かせません。（最初に受けた）短期集中教育だけで、10年間、20年間も間違った内容に基づいて個人的な感情から大衆に接する案内人（ドーセント、Docent）、ガイドがおり、これは非常に問題です。こういった方々に対する再教育は定期的に行われるべきです。大学内に公共歴史学課程があれば、ちなみに米国では主に大学院に公共歴史コースが設けられています。正規課程ではないにしても、公共歴史コースを開設し、案内人やガイドを続けようとする人々に対し、1～3年おきにどんな形ででも継続的な教育が受けられる課程を設けるべきです。

さて、歴史学と公共歴史学はどのように区分すべきでしょうか。それは明確ではないでしょう。歴史学の本質から見ると、公共歴史学課程は学部よりは大学院の方が相応しいと思います。歴史学と公共歴史学には共通しているところが多々あります。大衆と直接コミュニケーションをするという問題はあっても、その点において公共歴史学は十分専門化できると思います。大学で公共歴史を学問として研究、教育できるのか、私は十分可能であると見ています。内容的には事例研究が過程の大半になるかもしれませんが、大衆の歴史的教養をどのように高めるかという課題になるかもしれません。私はこのようなところは教育課程の中でも十分消化できると考えています。

先生方からのご質問に関して、どれほどお答えになっているかわかりませんが、もし他にご質問ありましたら、また出させていただきたいと思います。以上になります。

第2セッション

自由討論

モデレーター：南 基正（ソウル大学）

論点整理：劉 傑（早稲田大学）

パネリスト：問題提起者、討論者、
国史対話プロジェクト参加者

[発言は母国語、中国語翻訳：于 寧・韓国語翻訳：尹 在彦]



南基正 こんにちは。第7回韓国・日本・中国の国史たちの対話の可能性、第2セッションを始めさせていただきます。司会を務めさせていただきます、南基正と申します。ソウル大学日本研究所で日本の政治や外交、韓日関係などを教えています。一方では、史料を読む研究も行っているため、第7回まで開催された国史たちの対話の中で、たくさんのことを学び、感じています。本日は、特に歴史の大衆化の問題と可能性について模索しています。「韓中日の間で公共歴史というものを作り出していけるか」という問題提起があり、先生方の様々なご意見、問題提起、そしてそれに対するご答弁が第1セッションでありました。

論点につきましては、後ほど劉傑先生からもう一度ご説明いただきます。ですから、私が特に整理する必要はないと思います。この第2部は韓国及び日本時間で16時55分までとなっており、残りの時間はそれほど長くありません。なおかつ、自由討論のため、より多くの方々のご参加を期待しています。私はなるべくまとめ役に徹していこうと考えています。

早速、劉傑先生の論点整理に移りたいと思います。自由討論で発言を予定されている方が3名いらっしゃいます。劉傑先生の論点整理を基に討論の方向を集約していただければと思います。3名の先生方は劉傑先生の論点について論じられた上で討論をお進めください。では、まず劉傑先生から論点整理をお願いします。

論点整理

劉傑 南先生、どうもありがとうございます。今回は「国史たちの対話」の第7回目になりますが、今までの会議とはちょっと異なります。今回は討論に参加する先生方に事前の論文準備をお願いせず、そのまま討論のセッションに参加していただきました。このような討論は少し冒険的な試みになるかもしれません。特にオンライン開催の場合はよりリスクになるでしょう。ただ、このような対話はよりインタラクティブになるでしょうし、皆さんも自分の意見をよりはっきり表現できるのではないかと私たちは考えています。

「国史たちの対話」で我々が関心を持っている問題は、突き詰めていけば東アジアの歴史問題になります。この中には非常に複雑な問題が多く含まれています。私たちの対話の目的は、東アジアに存在する歴史認識に関する問題の原因を探り、そのうえで歴史問題の解決案を試みることであります。私たちは歴史家であるため、歴史資料や歴史研究の方法などの側面からこれらの問題にアプローチする場合がほとんどです。しかし、今まで「対話」をしてきた中で、私たちは歴史家が歴史家では克服しがたいいくつかの問題に今直面していることに気づきました。

これらの問題はまさに、先ほど韓先生、鄭先生、村先生そして沈先生が言及してくださったものになります。それらを三つのカテゴリーに分けてまとめてみました。

一つ目のカテゴリーは「歴史家が克服しがたい問題」になります。つまり、歴史家として、私たちの能力は非常に限られていますので、私たち自身の力だけでは、これらの問題は解決できません。具体的にいうと、歴史問題が政治問題の形で現れてくることはよくあり、歴史は政治の道具になってしまいます。政治が歴史学にある種の制約をもたらすことはよくあることで、ひどい場合は激しい破壊的な打撃を与えてしまうこともあります。この問題は、国によって現れてくる形式も異なります。具体的にどんな形式があるでしょう。第一に先ほど先生方も言及されたように、特定の国や地域では、歴史に対する解釈権は歴史家にあるのではなく、政治的に厳しく制限されています。第二に歴史と愛国の問題になります。歴史家はよく愛国的であるべきかどうかというジレンマに陥ります。歴史家には愛国の「正義性」と歴史研究の科学性の両立が不可能だと感じるがよくあります。先ほど先生方が言及した歴史大衆化の問題も今回の議論にとって重要な課題の一つになります。「正義性」は大衆からもたらされる場合が大半です。大衆の「正義」に対して、歴史家の能力と力は往々にして非常に微小です。これは歴史家が克服しがたい二つ目の問題です。第三は先ほど先生方がすでに述べた歴史大衆化の問題になります。つまり、資料のデジタル化とインターネットにおける公開に伴い、大衆の歴史へのアクセスはより容易になっています。これによって、大衆の歴史と専門家・研究者の歴史の間に大きな溝が生まれています。この溝をどう埋めるかも一つ困難な問題です。さらに、第四として、学術としての歴史学は今、大学においても、研究機構においても、衰退状態になっています。しかもこの衰退状態は長く続くかもしれません。これも歴史家が克服しがた

い問題です。

二つ目のカテゴリーは「歴史家がまだ十分に対応できていない問題」です。歴史家として身を入れて対応しようとするれば、いくつかの答えを見つけることはできるかもしれません。この中にどのような問題が含まれているのでしょうか。例えば、①皆さんも言及したオーラルヒストリーの構築と利用に関する問題があります。オーラルヒストリーの信憑性、普遍性、そして歴史史料としての歴史性などにおいて私たちがすべきことはまだたくさんあります。また、②感情記憶の歴史化は可能かどうかという、感情記憶に関する問題もあります。おおよそ20年前に、中国と日本の間で、「知の共同体」対話が行われました。その際にいかにして感情記憶を歴史にするかという問題は既に議論されています。③大衆史学からの実証史学とアカデミックな歴史学への疑問に対して、歴史家が正面から答えていないことも問題です。④歴史家が社会全体に与える影響力の問題もあります。歴史家が歴史研究から得た成果の社会への発信と共有は足りておらず、十分に受け入れられているとは言えません。

三つ目のカテゴリーは「歴史家がまだ最適解を見つけていない問題」になります。例えば、グローバル・ヒストリーをどう書くべきかという問題があります。また、先生方が言及したパブリック・ヒストリーの有効性の問題もあります。そのほか、歴史家と社会のインタラクションについて、例えば、歴史家は博物館や資料館で仕事する準歴史家とどう交流すべきかという問題もまだ答えが出ていない問題です。

以上をまとめます。繰り返しになりますが、大きく三つの問題があると思います。一つ目は「歴史家が克服しがたい問題」です。二つ目は「歴史家がまだ十分に対応できていない問題」で、その原因は我々歴史家の努力が足りていないことにあると思います。三つ目は「歴史家がまだ最適解を見つけていない問題」というより広範囲の共同研究が必要となる問題になります。主にこの三つのカテゴリーに分けて先生方が先ほど指摘してくださった問題を簡単に整理してまとめてみました。次の自由討論では、これらの問題をめぐって皆さんに積極的に議論していただけたらと存じます。どうもありがとうございました。

自由討論

■ 南基正

劉傑先生、ありがとうございました。歴史家一般が克服すべき課題として歴史と政治の問題、そして歴史家一般がまだ対応できていない問題、例えばグローバル・ヒストリーをどのように作り出していくか、このような課題があるという問題提起でした。

第1部で出てきた問題を含め、もう少し大きな問題提起をされたと考えられます。これに対して3名の討論者の先生方がおられます。その討論が終わった後、フロアの方々にもご参加の機会を設けたいと思います。平山先生、毛先生、金濤先生、自己紹介をお願いします。その上で新しい問題提起でも構いませんし、これまで出てきた内容についてのご本人の立場を説明していただくことでも良い

です。個別に先生方のことを紹介はしませんので、ご自身で紹介しながらご発言ください。言語は母国語でお願いします。前もって共有されている内容がないため、できる限りゆっくりそしてはっきりとした発音で、通訳がスムーズにできるようご協力をお願いします。

では、まず平山先生からご意見を伺います。7分程度で10分を超えない範囲内で進めてください。

平山昇 神奈川大学の平山昇です。韓成敏先生の問題提起に心から感謝いたします。

さて、村先生は「日本で起こっていること」を話してくださいました。私は、日本近代史研究者として、「日本で（過去に）起こったこと」をお話したいと思います。簡単に言うと、戦前の日本には、ニューメディアの普及によってアカデミックな歴史学が大衆感情に敗北したという歴史がすでにあるということです。

戦前の日本の学問、とくにアカデミックな歴史学は、二つのものに敗北したと私は考えています。

まずひとつ目は、「感動ストーリー」への敗北です。

村先生もおっしゃったように、江戸時代から大衆感情を熱狂させる歴史的ヒーローのstoryが人気を高めていきました。近代以降になると、愛国教育の普及とメディアの大衆化とともに、その人気は空前の規模になっていきます。歴史学者は一部のヒーローの存在を疑問視（または否定）したのですが、大衆はこれに対して「抹殺博士」と罵倒して反発しました。

象徴的なのは、1911年におこった南北朝正閏（せいじゅん）問題です（※正閏は「正統」と同じ意味）。詳細は省きますが、大衆向けの新聞に掲載されたある論説をきっかけに世論が沸騰して政治問題となり、教科書をつくった歴史学者が処分され、教科書の内容が書き換えられる事態になりました。

二つ目は「体験」への敗北です。

たとえ歴史学者が実在を疑問視してもそんなことに関係なく、このような「感動ストーリー」に関連づけた「史跡」や「聖地」（具体的に言えば記念碑や神社など）がつくられていきました。そして、鉄道など近代交通機関によるツーリズムの拡大とともに、このような場所を訪れて雰囲気や「体験」することで歴史をなんとなくわかったような気持ちになる、という傾向が広まっていきます。これは大衆だけでなく、知識人にもかなり大きな影響を与えていきました。

以上の二つからわかることは、近代化の重要な側面である「教育・メディア・移動の大衆化（民主化）」が、皮肉にも、アカデミックな歴史学を圧迫する結果をもたらしたということです。また、この二つのどちらとも、メディアとツーリズムという商業主義と結びついていたということも大変重要です。

このように、韓成敏先生が問題提起で指摘されたような、現代における歴史学と大衆社会との困難な関係は、戦前の日本で既によく似たことが起こっていました。現代では歴史研究者も含めて多くの人々がこの歴史を忘れてしまっている、あるいはその重要性に気づいていないように思われます。

現在、私たち歴史学者が直面している困難な状況について考えることはもちろん

ん大切ですが、今日集った私たちは歴史学者なのですから、現在の状況が初めて出現したものではなく、きわめてよく似たことが近代日本で起こったという歴史的事実をまずは共有したうえで議論をしていくとよいのではないのでしょうか。

私からのコメントは以上です。ありがとうございました。

■ 南基正 はい、ありがとうございました。日本の歴史学、とりわけ戦前の歴史学をテーマとして非常に重要な論点を提起してくださったと思います。アカデミックな歴史は戦前に一度敗北した経験がある、「感動のストーリー体験」ということで、今もう一度敗北した歴史を噛み締める必要がある、という問題提起でした。二番目に中国の立場からコメントを毛先生にお願いします。

■ 毛立坤 皆さま、先生方、こんにちは。中国天津南開大学歴史学部の毛立坤と申します。中国語で発言しますので、日本語と韓国語に同時通訳していただければと思います。この会議に参加したのも、歴史大衆化というテーマに触れたのも初めてになります。大学では中国近現代史の授業を担当しており、近現代都市史に関する研究を行っています。それでは自分の経験に関連させながら、歴史大衆化というテーマに対して自分なりの皮相な見解と認識を述べさせていただきます。

まず、公衆あるいは大衆は近現代史における重大事件や重要な歴史人物、歴史法則などに大変関心を持っていることを強く感じております。例えば、近現代史上にあった日中戦争や朝鮮戦争などの多数の戦争の話や、土地改革運動や集団化運動、上山下郷運動、文化大革命など新しい中国が建国された後に起こった数多くの政治運動の話はよく彼らの雑談の話題に出てきます。敏感な問題や専門的な問題などについて、彼らはそもそも分からないかもしれないので、それに触れることはあまりなくても、これらの運動や事件、戦争における自身の経験やそれに対する見方を述べるすることができます。彼らの経験談からは主流メディアなどにおける主流的な見方と異なる声がよく聞かれます。例えば、20世紀の1950年代から60年代の中国・河南省農村地域における女性の自殺問題に注目した学生がいます。このような問題は当局の機構や主流メディアの報道で取り上げることは不可能です。その学生は近所の年配者の雑談からこの問題を知るようになり、それがきっかけで、この問題に取り組み、これをテーマにして博士論文まで執筆したのです。論文はよくできたもので、農村女性は離婚などの方法を通じて不幸から抜け出そうと図っても実現できず、窮地に追い込まれた末自ら命を絶ってしまったという、隠蔽されていた、心が痛むような悲しい歴史をあぶり出すことに成功しました。その学生は近所の人から聞いたことを深く研究して、それをテーマに設定して博士論文を完成させたのです。これは大衆史学と密接に関連している事例だと私は思います。

歴史大衆化と深く関わっていると私が強く感じているもう一つの事例を紹介します。それは中国の若者に非常に人気のあるエンターテインメントとしての歴史の話題です。多くの若者は退勤後帰宅して真っ先にするのはご飯を作るのではなく、ドラマを観ることです。勤務時間帯に観られなかったドラマがネットで配信されたものを追っかけて観ます。数年前に非常に人気のあった清王朝への

タイムトラベルを題材にしたドラマの放送中に、この現象は顕著でした。このようなタイムトラベルを題材にしたドラマで描かれた歴史は実際の歴史からかなり離れており、一目見て嘘だと分かるくらい現在の生活経験が歴史ドラマに移植されています。にもかかわらず、退勤後真っ先にドラマを追っかけて観るくらい中国の若者の心がこのようなドラマにつかまれています。ここには、若い世代の中国人は歴史的な要素が含まれつつも現実を暗に示すようなドラマを好むことが示されています。これは彼らのストレス発散の手段にもなっています。若者はエンターテインメントとしての歴史が好きで、これは彼らが歴史に関心を持つようになる接点でもあります。

これら若者より上の世代の中年や高齢者たち、特に何世代にもわたってずっと同じ地域で共同生活をしてきた大家族のメンバーは、彼らに共通する生活の記憶が含まれる地域社会の変遷の歴史や家族の伝承に関する歴史、現地出身の著名人の活動の歴史などに深い関心を持っています。自ら経験した過去のことに関わりを持つことを通じて、家族や友人、近所の人々との集合的記憶を作り出すことは年配者の日常生活においてはよくあることです。誠に嬉しいことに、これに関心を持つようになった歴史学専攻の若い学生も増えてきました。彼らは冬休みや夏休みの帰省中に、上の世代の家族が語る記憶をオーラルヒストリーとして記述、整理して、従来は消え去っていくしかなかった歴史資料を大量に救い出しました。

これを背景に、近年中国では改革開放の歴史に関する研究も流行るようになったのです。現在50代から60代の中国人の殆どは、子供時代の生活が貧しくて、1978年に改革開放政策が実施されてからようやくいい生活ができるようになりました。彼らにとって、改革開放後の時代は彼らの人生の中で最も貴重な歳月になりますので、その歴史を回顧することに非常に熱心です。また、現代中国における「40年にわたる春節の帰省ラッシュ」をテーマに論文を書いた学生もいます。この論文は、人々が春節に帰省する経験を詳細に描写し、昔の不便や苦勞と、近年高鐵（訳注：中国の高速鉄道）の普及がもたらした利便性との対比を通じて、異なる時代における差異を浮き彫りにしました。このテーマ設定は大衆の生活に密接に関連しており、それは私が出会った学生たちの研究と本日の会議のテーマである「歴史大衆化」との関連性も示していると思います。

そのほか、歴史学の大学院を受験する青年学生には少し特殊な存在もあり、私は、毎年数人はそのような学生に出会います。彼らの学部時代の専門は歴史学ではなく、理工系出身の人さえいますが、何回落ちても一生懸命に歴史学の大学院に進学しようとします。このような学生に毎年出会っています。元の専攻を捨てて、歴史学を専攻する理由を彼らに尋ねると、そのほとんどは特定の歴史現象、歴史人物、あるいは歴史問題に夢中になっているからだそうです。大学院で歴史学を専攻することで、自分が持っているその執念、あるいは疑問を晴らしたいようです。それを追求するためには、元の専門を捨てるなどいかなる代価も惜しまないということです。歴史学の特定の問題は若者の心をつかめる魅力を持っていることを体現しているでしょう。

私の発言は以上です。ありがとうございました。

南基正 ありがとうございます。中国の近現代史、特に戦争と大衆運動という一世代が共有する体験が一般的かつ大衆的に歴史の生産、流通、消費においてどのような意味を持つかという観点から、このような問題提起をされたと思います。先ほど平山先生の提起された問題とも似通った文脈がここでも読み取れるのではないのでしょうか。ドラマチックなストーリーや世代を超えて共有される体験のようなものが、歴史大衆化と密接に結びついている点を強調された内容でした。次に、金滸先生をお願いします。

それから、毛先生のお話の途中で、確認できなかったことがあります。なるべくキーワードなどはチャットルームに書いてください。それを翻訳してくれる方々がおられます。大事な概念はチャットルームで共有できます。では金滸先生、お願いします。

金滸 南先生、ありがとうございます。ソウル大学アジア研究所の金滸です。私は、韓国近世史（訳注：近代以前の主に朝鮮王朝時代の歴史）を勉強しており、時期的には18世紀を中心にその前後の歴史を研究しています。韓中日に共通して問題になっている歴史、公共歴史もしくはその大衆化のような問題に関する討論に参加させていただき、大変勉強になっています。

通訳の先生方のため、急いでいくつか発表内容をまとめました。私は、歴史の大衆化は逆らえない流れであり、必然的なことと考えています。主たる専攻とする朝鮮時代後期、18世紀の学者、丁若鏞は中国古典『尚書古訓』への注釈書で孔子の話を引用しながら「富と教えの主導権が王になく、それが下へ下ると政治が成り立たない」と述べました。王、つまり最高指導者は生活の基礎となる富を掌握し、これを通じて土地のようなものを人民に配分する義務があり、経済的な土台を提供する時にのみ政治が行えるということです。もう1点の大事なことは、王が教えを統制する価値判断の最終責任者だということで、権力は物質的な土台だけでなく精神的な価値の最終判断者だということにもあると強調されています。

これがなぜ大事かと言いますと、常に東アジアでは歴史学が以前の政府や過去に対する最終判断の結果物であって、指導者がこれを解釈、決定、判断をする権限を有していたということと深く関わっているからです。先ほど、歴史家と政治の問題について議論がなされたのですが、やはり東アジアではそれが最も中心となる問題でした。

かつてから「春秋」が強調されていた理由も同じです。国家の観点から歴史が一旦整理されると、事実上、個々人の新しい挑戦は許されなかったと考えて良いでしょう。春秋の是々非々を国家が掌握するわけです。それでも、韓国史、朝鮮の歴史に限ってみても、多くの知識人が国家の正史に挑んできました。春秋の是々非々の国家による独占を批判し、それに参加しようとする多くの知識人の欲望が遠い昔からあったということです。日本の近代史に関してもお話があったのですが、大衆の歴史への参加を望む欲望は、既に数千年前から存在しており、これと共に歴史が発展してきたと思います。

今日を我々は「大衆社会」と言います。大衆社会とは大衆の欲望が一般化さ

れ、彼らの政治の主体としての自覚が過去と比べ物にならない程、大きくなった状態を指します。インターネットで情報の非対称性が解消され、多くの人々が良質の情報にたやすくアクセスできるようになっています。私の考えでは、1931年に米国の歴史学者カール・ベッカー（Carl Lotus Becker）が言ったように「全ての人には自分の歴史を書くことができる」という状況が、20世紀末、21世紀に入ってからもはや現実となっているのではないかと思います。この欲望こそ公共歴史学の中核だろうと思います。

誰かが整理した知識を伝達されるのではなく「自らが歴史の叙述の主体になろうとすること」こそ、公共歴史学の中核であり、大衆社会の最重要のテーゼではないでしょうか。百人百色のナラティブ、百人百色の歴史、一つの大文字の歴史（History）ではなく、小文字のヒストリーズ（histories）という歴史が可能になる状況が生じているということです。これを懸念しすぎて「疑似歴史学」だの「エセ歴史学」だのという必要はないと思います。これこそ我々が直面している大衆社会の生々しい現実でそれほど恐れる必要はありません。むしろ大衆を対象として大学が相応しい教育と授業手法、歴史学者の倫理、方法を提供できるかがカギになります。

従いまして、私は、今は危機というよりむしろ機会だと思っています。大衆の歴史的欲望、つまり歴史的主体としての欲望が強まれば強まるほど、かえって歴史学はそれを危機としてではなく、機会として捉えるべきです。もうすでに数十年前の米国やドイツの大学では公共歴史のカリキュラムを開発し積極的に受け入れ提供しています。中国も80年代以降、公衆歴史学が相当程度、大学に受容されていることを知っています。おそらく日本と韓国は最近、同様の問題について悩み始めており、相対的に出遅れているようです。公共歴史学の概念に対する混乱があるせいか、韓国では「公共歴史学」と呼び、日本では無難に「パブリック・ヒストリー」にしようという状況になっているのもその表れでしょう。

以上から、私はドイツの経験が重要であると考えています。マルティン・ルケ（Martin Lücke）の『パブリック・ヒストリー』という本を読んでもと、「公共歴史学での重要な価値はナラティブ中心の歴史的想像力を刺激する形で、また多元的観点を保つ形で、構成されるべき」と言っています。これが非常に重要だと考えます。知識中心ではなく、大衆が歴史の叙述の主体になり、歴史的想像力を発揮した上で、単一の観点ではなく多元的な観点を保つことこそ、公共歴史学の核たる教えだということに気づかされました。このような三つの要素を維持するためには、人種や階級、ジェンダーの多様性を認め、その間の対立を助長するのではなく、受け入れる態度こそが公共歴史学の志向すべき価値だということです。これもまた深く吟味する必要があると思います。「包容の態度」が非常に重要だということです。

朝鮮の18世紀に遡ってみると、丁若鏞の後輩にあたる洪吉周という人は、当時の朝鮮の儒学者たちが儒学をあまりにも狭く規定し、儒学以外のものを排斥する雰囲気があると言って、「歴史はこうあるべきだ」と規定して他を排斥する態度を批判します。洪吉周の主張は、正統な儒学をあまりにも狭く強調すると、他の全てを異端にしてしまう恐れがあるため、儒学者は限りなく包容の態度を備え

るべきということでした。

私は疑似歴史学やエセ歴史学という語自体、認めたくありません。そういう言葉自体、正統と異端を分けようとする宗教的心理が働いているように見えます。もちろん「耐えられないレベル」というものもあります。これは我々が懸念すべきことです。例えば、行き過ぎた商業化の追求や政治的介入が問題になること、または極端な歴史修正主義のようなもので歴史解釈に問題提起されることも起き得るでしょう。これは本日今まで多くの先生方が懸念を示されたことです。私も心配はしていますが、それでもエセ歴史学だの、疑似歴史学だのという造語でそれらを排斥してはいけなく考えています。

最後に、朝鮮の王であった正祖は学問を愛した指導者だったので、官僚らと非常に長い間、討論を行っていました。今回の討論を準備する中でその一部分を思い出したので、それを紹介したいと思います。正祖がある時『孟子』を読みながら討論を進めていました。仁と義に関して討論している中で、正祖は自分の官僚でもある知識人の士大夫に対しこう言い出しました。「言うべからざることを言うのはその罪が小さいが、必ず言うべきことを言わないのはその罪が極めて大きい」という内容です。

このように言うべきことを言わない、罪の大きい人を何と呼ぶかという「鄙夫（ひふ）」と呼びます。「あなたたちは鄙夫になりたいのか」と問いかげながら、官僚らに対して「必ず言うべきことを言うことこそ知識人の任務」と諭します。公共歴史学を含め、全ての歴史学者が言わなくて良いこと、研究しなくて良いことを研究せず、真に言うべきことを命がけでも言える見識と勇気を持つように促していけば、類似歴史学やエセ歴史学への心配は要らないでしょう。歴史学の任務は真に言うべきことを言うことであり、それは非常に大きな勇気と見識を求めること、このような態度を養えるようにすることだけで十分です。

私は今日の歴史学の危機を機会と捉えながら、「このような態度を他の歴史学者とどのように共有するかがより重要な問題」という点を提起したかったわけです。ありがとうございました。

南基正

ありがとうございました。歴史の大衆化は必然的というご意見でした。歴史の大衆化は、歴史学の危機というより機会を切り開いてくれる現象でもあり得ることでした。最後には公共歴史もしくは歴史の大衆的な手法を含め、歴史家がぜひ念頭に置いてほしい最重要かつ確たる態度についてもご指摘いただきました。

村先生のお話の中で、トリビアもしくは小話にこだわる問題が挙げられましたが、それとも相通じるところがあると思いました。3名の先生方がそれぞれ韓国、日本、中国の立場から、そしてやや異なる角度から、この問題についてもう一度触れられましたが、非常に重要な問題が出てきました。

例えば、私が感じているところからすると、特に最後に金湍先生から提起された内容で、「他国に比べ韓国と日本では歴史の大衆化もしくは公共歴史の面で遅れているようだ」とおっしゃいました。公共歴史の分野での現象として実際にそうであるのであれば、なぜそうなっているかについても気になります。また、歴史の大衆化を恐れずに受け入れる必要があるとしても、ある程度線引きは必要

ともおっしゃいました。これは金湍先生だけでなく、全ての先生方のご指摘でもあったと思います。果たしてその「線」とは何を意味し、なぜその線を越えてはいけないかということを確認する必要もあるでしょう。そこが歴史というものを我々がきちんと考えるべきポイントではないかと思います。

こういう点を踏まえ、より多くの方々に討論へ参加していただければ幸いです。今から全ての参加者に発言権を開放したいと思いますが、それでもより多くの方が参加できるように5分以内にまとめてお話しください。母国語でご自身の所属とお名前もお願いします。特殊な用語をご使用される場合には、説明が長くなっても構いませんので、キーワードも皆が理解できるようにしていただければと思います。

さて、どなたから始めましょうか。画面上で挙手していただいても良いですし、私が全てを見ることはできないので、挙手のボタンを押すか、チャットルームにお名前を入力してください。まだ手を挙げている方はおられません、それでは先ほど塩出先生が時間が許せばコメントしても構わないとおっしゃいましたので、塩出先生、お願いしても良いでしょうか。

塩出浩之

京都大学の塩出です。韓成敏先生、プレゼンテーションをありがとうございました。私は韓先生の危機感を共有したいと思いました。

なぜかという、そもそも歴史とは過去を語る行為・実践そのもの、あるいはそういう行為すべてを指していると思うんですね。ですから歴史というものが物語化することや消費の対象になることは避けられないことなのではないかと思っています。この点は韓先生とは考えが違いますが、歴史学者が歴史を独占することは、基本的に不可能ですし、村先生もおっしゃっていましたが、過去にもなかったのではないかと考えています。

ただ、むしろ今日ほど大衆（あるいはエリートじゃない人々）が、歴史に関心を持つようになった時代は、これまでなかったのではないかと思います。先ほど金先生もおっしゃっていましたが、そういう点で、歴史学者にとってこれはチャンスなのではないのかと考えます。

問題はむしろ、一般に消費される歴史というものが、基本的に国家の歴史であるということなのではないかと思っています。あるいは、学校で教わるような歴史だけが消費の対象にされている点が、むしろ問題なのではないかと思っています。

つまり過去というのは、いろいろな形で語るができるのに、学校で教わるような国家の歴史だけが、歴史として消費されていることがむしろ問題なのではないか。その点で、鄭潔西先生や毛立坤先生が紹介されたように、一般の人々＝大衆が自らの歴史を語る、あるいは語ってもらうということは、非常に意義の大きいことではないかと思っています。それは歴史と歴史学との間にあるギャップを埋めることができるひとつの可能性だからです。

たとえば自分の過去について考えるときに、現在の記憶と過去の日記のどちらを信用するかということを見ると、「資料」ということの意味も少しわかるのではないかと思うのです。歴史学というのが過去にどのようにアプローチするかということを知ってもらうには、たとえば、そういう形で自分たちの歴史を考

えることに、ひとつのチャンスがあるのではないかと考えました。

もし可能なら鄭先生に質問したいのですが、ご専門は明代の歴史ということですが、中国社会での大衆的な歴史の消費について、何か気になったこととか、問題を感じたことはないでしょうか。

■ 南基正 ありがとうございます。今具体的な質問が出ているのですが、その前に、まず佐藤先生からもコメントがありました。佐藤先生、いらっしゃいますか。

■ 佐藤雄基 立教大学の佐藤雄基です。先生方、今日は重要な議論を聞かせていただき、大変刺激になりました。いろいろと考えさせられることが多かったのですけれども、私のほうから2点、気づいた点や気になった点について、お話しさせていただきます。

1点目は村先生のコメントについてです。「専門家不信、専門知の権威の崩壊」は、歴史家だけではなく、学問全体の問題であるというご指摘がありました。これに関して、専門的「医学」を例に考えてみました。医学では、民間療法だったり、インチキ療法だったり、お金の問題とも絡んで大変盛んです。そして、それを信じる人たちに具体的な健康面・金銭的な被害をもたらしています。それが社会問題になっているわけですが、一方でそうした民間療法の場合、不治の病に悩まされる人々にとっては「救い」にもなりえる側面もあると思います。

「医学」をめぐるそうした問題を念頭においたとき、疑似科学的な「歴史」が広がっていることで、たとえば具体的にどういう被害をもたらしているのだろうかということが論点になると思います。つまり、大衆的な歴史、疑似科学的な歴史、そのすべてが問題であるわけではないし、今までも議論に出てきたように、そうした歴史の大衆化は避けられないわけです。そして、民間療法がそうであるように、ある人々にとっては「救い」となる場合もないわけではありません。そう考えると、歴史学が取り組むべき問題というのは、かなり限定していくべきではないかと思うのです。つまり、あれはだめ、これもだめとは言っていないのではないかと思います。疑似科学的な歴史はそれを信じる人びとに具体的にどのような「被害」をもたらすのか。その「被害」の様子が決まれば、専門的な歴史学に取り組むべき社会的な役割も見えやすくなるのではないかと思います。これが1点目です。

2点目は「公共歴史」の問題です。歴史教育だったり、博物館の学芸員の活動だったり、あるいは歴史小説を書いてきた人の創作活動というのは、これまでも長く続いてきました。それをあらためて「公共歴史」と概念化して可視化していく。それは歴史学の研究者にとっておそらくメリットのあることだと思います。

それでは、歴史家たちによって「公共歴史」として再定義される側、つまり、歴史教育だったり創作活動だったり、クリエイティブな活動を行ってきた人々にとってはどのようなメリットがあるのか。たとえば、中学校や高校で歴史を教えている先生というのは、歴史学とかかわりをもつ一方、同時に教育者として教育学の専門家でもあると思います。韓国や中国の状況はわかりませんが、日本では歴史学科出身以外の、たとえば教育学だったり、ほかの分野の教育を受けたりし

た人が、中学校の歴史の先生になるというのが普通ですし、増えています。つまり歴史教育の現場においても、歴史学よりも教育学の影響力のほうが強くなりつつあるのが日本の状況だと思います。

歴史の小説家に関しても、歴史の担い手であると同時に、第一には小説家として文学に携わる人です。歴史学と公共歴史という、歴史家の目線からみて、歴史学が指導者で、公共歴史が受け手側であるといった歴史家中心の図式が語られがちであるように感じています。実際には歴史学を含むいろいろな分野、歴史とか教育とか小説とか複数の専門分野が乗り入れる領域なのではないかと思います。そう考えたときに、歴史学だけで議論するだけではなく、たとえば教育学とか文学（小説家）側がどう考えているのか、複数分野の協力関係が必要なのではないかと考えました。今回のような場に、むしろそうした方々をお招きして議論してみたかったです。

これに関して、少し歴史的な経緯を説明というか考えてみたいと思います。もともと日本の場合、歴史学が歴史教師や学芸員に強い影響力を持っていたと思います（その卒業生がその職業についていました）。ただ、最近は日本の場合、学芸員に関しては「文化財学」などといった専攻が新しく生まれ、学問分野として独立しつつありますし、20世紀後半は教育学が独自の学問分野として発展してきて、むしろ史学科以外の学部学科出身の歴史教師も増えて影響力を強めてきたという経緯があります。

そう考えると、今あらためて「公共歴史」という問題が、歴史学にとって課題になってきたのは、新しい現象というよりは、他のいろいろな学問分野（たとえば「文化財学」や「教育学」など）との関係の変化によって、学芸員・教師などの「公共歴史」を歴史学が独占できなくなったこと、そのため新たな関係の「再構築」が歴史学に求められるようになった結果かもしれないと思っています。このあたりの歴史的な経緯をどう考えるのかは、国によって違いがあるのかなと思います。私からのコメントは以上になります。

南基正

ありがとうございました。佐藤先生は「民間療法や詐欺まがいの治療法が健康や金銭面で被害を与えることもあるが、部分的にはそれなりに効用もあるということなどをどのように歴史に置き換えて考えるべきか」と問題提起してくださいました。また、歴史を担当している歴史専攻者以外の人と言うべきでしょうか、教育学を専攻して歴史を教えている人、もしくは文学や文芸を専門とする人々が歴史を扱うことを見てみると、今の現象は真新しいものではなく、このように構成される歴史をどのように再構築していくかが課題だとまとめてくださいました。

私のまとめは私なりのものでありますので、他の先生とは異なるかもしれません。参考程度にしていただければ幸いです。今チャットルームに質問が一つあります。村先生に対するご質問です。今、韓中日のそれぞれの言語で質問があるので、先生方は一度ご確認ください。村先生はこれまでの内容も含め、ご発言を用意してください。宋先生が今、手を挙げておられます。コメントいただけますでしょうか。画面から見えなくなったので、まず村先生、コメントをいただけますでしょうか

■ 村和明 たくさんコメントや質問をいただいて、非常にたくさんの方のことを考えました。お一人ずつへのお返事は難しいので、今どのように整理してしゃべるか少し戸惑っていますが、なるべく手短かにまとめて、再度のコメントとしてお話ししたいと思います。

ひとつは平山先生が具体的に紹介してくださった、日本の近代における経験について。これは非常に重要だと思います。私が第1部でコメントしたなかで、短くではありますが、「歴史学の手法で考えるべきだ」「専門家集団と国家社会との関係を歴史として考えるべきだ」と申し上げましたが、まさにこの話がしたいという非常に素晴らしい事例を挙げていただいたと思います。

平山先生に挙げていただいた例に続けますと、私は日本では、広い意味でのパブリック・ヒストリーに対する関心が、専門家のなかにもあまり大きくない傾向があると思っています。概念自体も、日本の歴史学者の中に「どういう言葉を使うか」についての合意もない段階であると思います。ですから、先ほどの私のコメントでも、短い言葉、短い概念はほとんど出していないと思います。

ご質問いただいたなかにも、「日本で最初のパブリック・ヒストリーも、歴史学者のなかではなく、民俗学のなかから出てきたのではないか」というご指摘がありました。まさにそういうことだと思います。

平山先生に紹介していただいたお話のように、近代の日本の歴史学者がアカデミックな歴史学研究を展開したときに、とくに天皇をめぐる問題について、社会と国家のものすごい攻撃を受けました。こうした圧迫を受けた結果、日本の専門家集団はどのような対応をとったのか。ひとことでいうと、引きこもったのだと思います。具体的な研究史は省略しますが、「大学の専門家がいうことは尊重してほしい」、「大学のなかのことは大学が決める」、「専門家が議論することは専門家が決める」という形で壁を作り、世の中の歴史観にあまり積極的にかかわろうとしないという戦略をとってきたところがありました。

例外はあります。とくに1950年代は例外が多かった時期です。これは塩出先生がおっしゃっていただいた点につながりますが、民衆の歴史、地域の歴史に関してです。ある特定の村なり、ある領域なりに出かけて行って、そこのご老人の話聞いて、その土地の資料を研究して、彼らが語る歴史に耳を傾けて、地域の歴史を研究者と研究者以外の方が語るという試みを、かなり長く続けてきています。しかし、それが全体にうまくいったかという点、現代では非常に微妙な関係です。うまくいっていないと評価すべきではないかと感じています。

次に、「現在の状況は危機ではない。これはチャンスだ」というようなご指摘が、これは金先生、塩出さんからもあったと思います。先ほど劉先生が課題を大きく3点に整理され、「歴史学者としては、道は見えているのだが十分に進んでいない」ところと、「どういう道に進むかまだ決まっていない」とも問題を分けられたと思います。その整理を参考にしますと、危機と機会は対立しないと思います。私は歴史学の危機だと考えますが、この危機を同時にチャンスとしてもとらえ、「歴史学者は何を避けてきたのか」、「歴史学者は何を選んできたか」をもう一度思い出して、「私たちの価値観は何なのか」、「私たちが認めることのできない価値観は何なのか」ということを反省する、あるいは変わっていく。それ

は両立するのだと考えます。

そのうえでもう一つ。なかなかうまく整理できないのですが、歴史の専門家が専門家以外の全ての人々と、どこまで共に歴史を語ることができるのかという点について、私はやや悲観的です。

事実をもとに議論しなくてはならないというところまでは、ひょっとしたら共有できるのかもしれないのですが、考えなければならないのは、「事実としてはひとつも嘘をついていない。すべて正しい事実」なのに、「並べ方と組み合わせ方と選択で大きな嘘をつく」ということが、いくらでも可能だということです。そうすると、何のために語るのか、どのような結論のために語るのかという価値観が違っていると、これは一緒に議論できない部分があると思います。

例えば金先生がドイツの例を紹介してくださいましたが、たとえば価値化の多様性が重要である、これは全く私もその通りだと思います。ただ、そう考えていない人たちもいるわけです。たとえば日本は世界で最高の国だ、韓国人は劣っているんだということが、自分の頭の中で決まってしまう人がいるんですね。その人たちが実際に引用する資料がすべて事実だとしても、我々が一緒に考えることができるのかというと、すごく難しいですね。

ですので、先ほどお話ししたことに少し戻りますが、どのような価値観を持っていて、どのような倫理性を持っているのかということ、我々は確認しなければならぬし、一緒にできる人と、一緒にできない人が必ずいるだろうということです。

次で最後にします。佐藤雄基さんから医学の例を出していただきました。誤った医学の知識は人間を傷つけると。全くその通りだと思います。これは疑似科学の危うさを説明できる素晴らしい例です。誤った歴史は、人間にどのような害を及ぼすのかということですね。これはすごく重要なご質問だと思います。

ひと言でいえば、社会の分断だと思います。今回のこの対話企画のまさに逆ですね。結論が決まっている、感動を求めている。そのなかでとくに、敵を探している。自分のプライドを満たすものを探している。そういう人たちにとって、疑似歴史学的なものは非常に魅力があるわけです。歴史というのは世界を語りますし、自分と他者を語ります。我々とは何か、彼らとは何か、我々と彼らの関係は何か。それを歴史は語りますので、そこで政治的な結論に誘導されたり、短期間の快感・気持ちよさを価値として、それを目的に語ったりするものばかりが横行してしまえば、対話というものは難しくなります。敵というのが自分の中でどんどん固まって、どんどん悪い存在になっていきます。これが今後の社会・世界がどのように秩序を維持していくかという意味で、極めて深刻な問題だと思います。

たとえば、アメリカの大統領選挙のあとの暴動であるとか、今回のコロナをめぐるある種の陰謀論ですね。ワクチンの背景にある巨大な悪の組織があって、人間を支配しようとするという陰謀論。こういうものと疑似歴史学は非常に親和性が高いと思います。これが私が考える、一緒に考えていくことができない、戦うべき相手というのはそういうものですね。

それと我々専門家の歴史は本当に疑似科学とは異なっているのか、我々が語っている歴史は権威的であって、無意識のうちに国家やある種の権力のためにやっ

ている面はないのかということです。

結局何を言いたいのかということ、私はずっと分断を強調する話をしている気がしますが、何が許せないのかということのを改めて確認すべきであって、そのためには我々が守るべき価値は何なのかを考えなければいけないと思います。

すみません、質問いただいたことでお答えしていないこともあると思います。時間の関係でこのくらいにします。ずいぶん長くしゃべってしまいました。ご容赦ください。ありがとうございました。

南基正 たくさんのことについてお話ししてくださいました。歴史の大衆化というのが、望ましい側面があったとしてもどこかでは線引きが必要なのでは、という立場からのご発言だったと思います。他の方々はどのように捉えておられるか気になります。宋先生が戻られましたので、宋先生、お願いします。

宋志勇 ありがとうございます。先ほど確認してみたところ、今日の会議に参加してくれた観客は70人を超えていまして、本当に嬉しく思います。残りの時間は他の先生と学生に議論してもらいたいのので、私の発言はごく簡単にさせていただきます。

まずは私自身が経験した歴史大衆化の一つの事例を紹介したいと思います。少し前に、腰痛のため、病院の整骨科を受診しました。私が日中関係史を研究していると聞いた整骨科の先生は、急に彼の日中関係史に関する見解を話し出し、10分間以上も続きました。私の専門知識から見ると、客観的ではなく、正しくないものが多く含まれていましたが、一般大衆においてはかなり共有されている見方だと思います。その時、歴史学の専門家として無力感を感じました。彼が話し終わった後に、私が腰痛の治療について尋ねたところ、彼はいい方法がないので湿布を貼ればよいと言って、2分間も経たずにさっさと私を帰らせました。

私たち歴史専門家と大衆史学者はどのように健全な関係性を結ぶことができるのでしょうか。歴史大衆化に対して歴史専門家が持つべき態度について、一点だけ述べておきたいと思います。歴史専門家は歴史家のプライドを持ち、歴史研究の基本的な規範や倫理を守らなければなりません。同時に、積極的に大衆史学に参入し、大衆史学に専門的かつ正確な歴史知識を伝え、大衆の歴史学に対する需要に応えるべきです。そして大衆史学のいいところをきちんと学ぶべきです。大衆史学には非常に高いエネルギーが潜んでおり、その規模もとても大きいので、一人の歴史専門家の能力ではとても及びません。実は、大衆史学には私たち歴史専門家が勉強すべきことや参照すべきことがたくさんあると思います。先ほど多くの先生も指摘したように、現在の歴史学はもう歴史専門家が独占するものではなくなくなっています。将来の歴史ナラティブと歴史記述は、きっと歴史専門家と非専門の大衆史学者が共に構成することになるでしょう。時間が押していますので、この一点で終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

南基正 ありがとうございました。まだ解決できていないところがたくさんあり、他の先生方もそれぞれのお考えがあると思いますが、ここで全て解決できないというこ

とについて申し訳なく思います。まとめることすら難しそうです。

この大会が韓中日の国史たちの対話だということ、対話の可能性だということを念頭に置いていただきまして、これまで取り上げられた問題を個別にまとめていただければと思います。歴史大衆化の現実と経緯、特徴などを各々、韓国、中国、日本の現実から確認し、そこから一定の相違点も見えてきており、共通の問題もあったようです。そういった相違点や共通の現象が韓中日の近現代史の中で、それぞれ少しずつ異なる経緯、変遷があったでしょうが、そういった歴史の変遷とどのように結びつくかについても確認したいところです。

次に、もし韓中日が共にできる公共歴史をテーマとしたら、韓中日で話し合えるより大きな意味での公共歴史というものが果たして必要なか、必要なのであればそれは可能なか、可能なのであればそれはどうやって可能になるか、こういった点についてもこれから議論しなければならないと思いました。

今までの内容を、本日のパネリストの方々のお話を中心に申し上げると、日本は過去、戦前の経験があったからか、歴史の大衆化については非常に慎重で警戒する雰囲気があったようです。もちろん、それに反対する立場のパネリストもいらっしゃいましたが、それに比べ、中国では大衆の歴史がとても活発で中国社会がそれを現実として受け止めているような印象を受けました。

韓国では問題提起をしてくださった韓先生が懸念の立場だったとすれば、最後の討論者の金先生はむしろそれは必然的な過程で、機会としてとらえ得るとおっしゃいました。それぞれ、個別のレベルでも立場がやや異なり、国ごとにも立場が異なっていたので、議論をまとめることは困難と感じました。第3セッションで引き続き議論をまとめてくださるとありがたいです。これまでの7回の対話を通じて、韓中日の国史間の対話がこれから目指すべき方向に対して一つの観点を提供してくださったということで、第2セッションを終わらせていただきます。

十分議論できなかつたところが多々ありましたが、時間の制約もあるのでこの辺りで終わりにしたいと思います。ご了承ください。参加してくださった先生方、ありがとうございました。

総括

三谷 博

東京大学名誉教授



今日は「歴史大衆化と東アジアの歴史学」というテーマで対話を進めました。これは歴史のプロとして日々感じている難しい問題です。それを韓成敏先生がとても重要な問題として提起され、詳細な説明をしてくださいました。改めて感謝申し上げたいと思います。

この韓成敏先生の問題提起に対して、日中韓三国のメンバーが大衆消費のための歴史というものが社会全体に対して、とくに職業的な歴史家たちに対して、深刻な問題を引き起こしているということを実感されていて、鋭敏な反応をされたように思います。その点に深い敬意を表します。

ただ第2セッションの論点整理で劉傑先生が指摘されたように、この歴史大衆化を考える場合には、単に大衆と職業的歴史家だけを考えてはいけなくて、実は国家や政府というもう一つの巨大な権力を勘定しないといけないと思います。そういう点で、今日の議論はあまり発展しませんでした。これはとても難しい問題があるからだと承知しております。

そのなかで戦前の日本について平山さんが二つ重要な問題を提起されました。そのあとで村さんが、それに補充の発言をされましたけれども、韓国や中国については同様な問題が語られたようには見えません。これはやはり留意すべき問題であると思います。実際に議論するのはなかなか難しいのですが。

さて、その上で元へ戻りまして、韓成敏先生や村先生は、大衆消費のための歴史、それがどんな弊害を引き起こしているかということに、ずいぶん注意を払っておられます。とくに韓成敏先生がおっしゃった言葉を使うと、愛国主義という決まった語りのパターンがあり、それが人々をその中に閉じ込める強い力を持っている。それは果たしてどういう力なのかというのが、私には大きな疑問として残りました。

この大衆消費のために語られる歴史を、韓成敏先生はあえて「疑似歴史」、本物に似ているようだが実は間違った歴史だとおっしゃいました。そして、それを克服する手段はいろいろあるとしながら、パブリック・ヒストリーを有力候補として提出され、あとは他の先生方の討論に委ねられました。

しかしながら、今日とても印象的だったのは、「いや、そんなことはない。大衆の歴史も良い点があるのだ」という議論が出てきたことです。私は少し驚きましたが、それはそれなりに教わる場所がありました。それから金滸先生が、パブリック・ヒストリーというものは、大衆が歴史のなかで主体となる貴重な機会

なのだとおっしゃいました。確かにそうです。今までは国家が決めた歴史解釈だとか、学校の教師が教える歴史解釈をそのまま受け入れよと強制されてきた、その受け身の大衆が、自分で歴史を作る人となる。これはとても大事なことで、確かにパブリック・ヒストリーの利点だと思います。ただ、ここで金先生は、ドイツの学者の説を取り上げて、エスニシティとかジェンダーとかクラスとかを越えた、多様な歴史解釈が立ち上がるのではないかと期待されました。

残念なことに私はあまり楽観できません。先ほど申しましたように、この大衆が自分でつくる歴史のほとんどが、愛国主義に汚染されているからです。それをどう克服したらいいのか、それが我ら歴史学者の共通の課題であろうと思います。

それから中国の鄭潔西先生と毛立坤先生はお二人とも、学生たちが大衆への聞き取りを積極的にやっていて、そこから大衆の歴史を立ち上げる仕事をしている、これはいま大人気だとおっしゃいました。このオーラル・ヒストリーというのは、確かに意味のあることであり、昔の歴史学がはっきりいえばエリートがエリートのために書く歴史であり、大衆はそれに引きずられる存在であって、要はイデオロギーとして機能していたことに比べると、ずいぶんましなものであるだろうと私は考えます。ただし、これはやはり範囲が狭いと思います。

私のように日本の歴史家で、中国・韓国と歴史対話を試みたことのある人間からすると、国家がやったことに対して責任をとれと言われたときに、個々の日本人の大衆の歴史を語っても、意味がないわけです。やはり国家レベルの歴史をどう解釈するのかという問題は避けられない。

それを認識したうえで、しかし大衆の中に飛び込んで書く歴史というものは意味がある、それは確かだなという実感をいたしました。

さて、日・韓両国に戻りまして、アカデミズム史学という、今ここにいる人のほとんどが所属している人間から見ると、たとえばYouTubeで語られる歴史というものは、大変困ったものだという印象を持たざるを得ないと思います。

私は若い頃からアカデミズムのトレーニングを受けてきました。そのなかで一番大切な教えは何かといえば、「史料の批判的解読」であると叩き込まれました。日本の歴史学というものは、戦前以来ドイツの歴史学の影響を受けて、史料批判というものを絶対的な価値として想定してきました。従って、我々は手にした史料を見て、「これはどこまで信用できるのか」と疑うのが最初の第一歩で、それをどうすれば測れるのかといろいろ考えるのが第二のステップでした。それを無意識のうちに自動的にやってしまうのがプロの歴史家であるというのが、日本の日本史学が体现しているイデオロギーです。

そうすると、都合の悪い史料がたくさん出てきたときに、これを無視するわけにはいかなくなる。実に損な商売だなあと感じます。YouTubeで歴史を語っている人たちは、都合の悪いものは全部無視すればいいわけですから、楽なものだなあと、はっきりいえばやっかみを起こします。

しかしながら、我々はそうするわけにはいかない。YouTubeで語っている人たちはもう少し考えてくださいと、都合が悪い史料がここにあるんですけど、これはどうしますかと、やはり問わざるを得ないわけですね。

そういうわけで、アカデミズム史学からすると、大衆のための歴史学というのは困った存在であるが、だからといってただ非難して済むわけではない。今という時代は、何度もいろいろな方が指摘されたように、我々の方が劣勢になっていて、非難したところで効き目は全くないわけです。そうすると別の手段はなにか。それはもう対話しかありません。アカデミズム史学の方から、大衆歴史をやっている人たちに接近していく以外ないと思います。しかし、我々には、ニューメディアのなかで語っている人たちに接近する手立てがほとんど、いや全くないように思います。しかしながら、伝統的にどの国の歴史学、アカデミズム史学の人たちも、中学や高校の先生たちとか、あるいは博物館の学芸員たちとは常時接点があったはずで、少なくとも日本の歴史学者の場合はそれがあつた。つまり自分の教えた生徒たちが、中学高校の教師や学芸員になることがかなりあるからです。

この接触はシステムティックに行われているわけではなくて、その点、我々日本の歴史学者はさぼってきたと言っているいいかもしれません。しかしながら、ここに、「高大連携歴史教育研究会」という組織があります。高校と大学の教師たちが連携して、高校での歴史教育をどうするかを考えるという組織で、大阪大学のベトナム史専攻の桃木至朗さんやイギリス史の秋田茂さんが中心になって、ずいぶん長い間取り組んできました。そしてこの春から始まった「歴史総合」という高校の科目では、その教科書を作ったり、その実際の教室での教案、教え方のプランを作ったりするために、大学教師もずいぶん高校の先生たちと努力をしています。自分が考えたアイデアを仲間たちに供給して、お互いに学び合うことをやっています。私も一部協力して、先生たちの話を聞き、「ここはこう直したほうがいいんじゃないですか」などと話したりしました。私がたとえ引退しても組織はできあがっていて、これからもかなり続けていこうと思っています。ですから、日本の歴史の高校と大学の連携はそういう形で始まっていて、できれば今日参加している人たちも、積極的にその会に入っていただければと思います。

ただ、これははっきり言って不十分。やはり文部科学省が予算を使って、定期的に中学・高校の先生達を再教育する制度を作る必要があると思います。私は日本学術会議で「歴史総合」科目の元になった案を仲間と作り、提案しましたが、そのとき我々はそういうリカレント教育の必要も議論し、日本政府に対する提言にもそれを書き込みました。しかしながら、これはまったく顧みられることはなかった。予算がないのかもしれませんが、それでは困ります。中学・高校の先生たちは、ふだん生徒指導が忙しすぎて、歴史学の新しい学説を学ぶ時間がほとんどないのです。そのなかで自主的に勉強している人たちは本当に偉いのですが、普通の先生にそれはできません。ですから、4～5年に1回、たとえば夏休みに1週間ぐらい徹底的に学ぶ機会を用意する必要があるだろうと思います。これはやはり日本のアカデミズムの歴史家たちが、文部科学省に対して要求すべきであろうと思います。

最後に、韓成敏先生が提案され、村先生も示唆されたことがあります。それは大学に普通の歴史学のコースとは別に、パブリック・ヒストリーのコースを設けてはどうかということです。これはよき一案と思います。ただし、新コースを設

けるだけではだめです。さっき言いましたように、このパブリック・ヒストリーのコースと普通の歴史学のコースが分かれたままだと、何の意味もありません。といいますのは、日本の場合、中学・高校の先生たちの多くが、教育学部の出身です。文学部や法学部や経済学部にも歴史学がありますが、それらの出身ではありません。ところが、この教育学部の歴史学のコースというのは、教室でどのように教えるのかというノウハウは教えるけれども、学生達が自分で生の史料を読み、その解説を試みるという経験はさせません。一応、教えるべき内容、歴史の解釈は教わるのですが、歴史学の一番の核心部分である「史料の批判的検討」という経験をしないで卒業し、学校の先生になるのです。

ですから、パブリック・ヒストリーのコースが、それと同じことをやってしまったら、新たな分断が再生産されるだけで、意味がないだろうと思います。私は日本にもパブリック・ヒストリーのコースは作ったほうが良いと思います。そのためにはやはりこのような配慮、そしてとくに通常の歴史学をやっている専門家たちが、パブリック・ヒストリー、さらに中学・高校の先生たち、さらに学芸員たち、さらにボランティアで博物館で説明員をやっている人たちにも、自分からアクセスするようにして欲しいと思います。そのためには、アカデミズムの歴史家たちが、今まではバラバラに勝手な仕事をやっていたわけですが、横に連携して行動するしかない。アカデミズムからそのへのイニシアチブをとっていただけだと思います。

少し話が長くなりすぎましたが、今日は非常に大事な話が語られたと思いますので、あえて申し上げました。本当に先生方、貴重な話をありがとうございました。感謝申し上げます。

それからなんと言っても、今回も通訳の先生たちにとっても大きな負担をかけました。皆さんと一緒に心より感謝したいと思います。ありがとうございました。それからもちろん渥美財団のいつも変らないサポートにも感謝申し上げます。これからもよろしくお願いいたします。では、私の話はこれで終わります。ありがとうございました。

閉
会
挨拶

趙 玠

高麗大学名誉教授



[原文は韓国語、翻訳：尹在彦（立教大学）]

こんにちは。始めたいと思います。

第7回「国史たちの対話」のテーマは「歴史大衆化」でした。「歴史大衆化」の問題は、早々と「公共歴史（public history）」が注目した課題の一つでした。パブリック・ヒストリーの全てではなく、その一部としてです。「歴史大衆化」が今回のテーマに選ばれた背景には「パブリック・ヒストリー」という歴史学の「新たな」研究動向を伝統的な歴史、アカデミーの歴史学でもこれ以上度外視することが困難であるという、韓中日の歴史学界の判断があったと思います。歴史大衆化に対する韓先生の問題提起に続き活発に議論が進められました。この会議を締めくくりながら、歴史学界一般で提示されている公共歴史の概念と展望、そして韓国の公共歴史学の現状問題が何かについてもう一度まとめてお話ししたいと思います。

ご存知の通り、公共歴史、即ちパブリック・ヒストリーという語を初めて使用したロバート・ケリー（Robert Kelly）は「公共歴史は教室の外で実践される歴史である」と定義したことがあります。この定義から読み取れるように、米国の伝統によるパブリック・ヒストリーの概念は伝統的な「アカデミックな歴史学」の独走への抵抗とも捉えられます。もちろん、このようなパブリック・ヒストリーの概念が米国で使われる前の1920年代からヨーロッパの歴史学界と哲学界では、公共もしくは公共性、そして公衆、大衆などの概念が注目されたことも記憶すべきです。1970年代以降、公共歴史学はユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）の「公共圏＝パブリック・スフィア（public sphere）」の理論からよりインスピレーションを受けたと思います。

平山先生が討論の中で提示されたように、一つの時間や現象を理解するためには歴史学者的な理解が必要だと思います。歴史学史を通じて、公共歴史を見てみると、欧米諸国での登場の過程はそれぞれの契機と歴史的条件がありました。そのため、欧米の歴史学者の間でも「公共歴史」の概念において相違が現れていました。そして、本日の発表及び討論を通じてもわかったように、アジアの国々での公共歴史もそれぞれ固有の背景と文脈を持っており、それぞれ異なる立場から討論が行われ、多様な観点を提示してくださったと思います。本日の会議でも講演者と討論者の先生方は各国の公共歴史学の特性を反映した上で、ご自身の研究を進めてきたのではと考えられます。

一方で、公共歴史学では歴史の生産者としての大衆に注目すべきだという認識

と共に、ニューメディアの発達に関連して歴史のコミュニケーションと普及に関わる現象に注目すべきであるとしています。金滸先生は歴史の生産者としての個人のナラティブを重視する現象について、個人の存在に対する注目が公共歴史の生み出した中核になる要素と捉えていました。しかし、国によって状況は違うでしょう。

本日の会議で共通していたのは、「歴史の叙述と再現を通じたコミュニケーション」が公共歴史の持つ最大の関心事ではないかということだと思います。歴史を叙述し再現する、再現して一般大衆とコミュニケーションをするということについてご指摘がありました。しかし、公共歴史は集団的歴史意識の形成を主たる目標としている学校教育と違って、このような集団的歴史意識の養成というはっきりとした目標を提示してはいません。これは公共歴史の概念でヨーロッパや米国で共通して示されている特性です。社会の中で歴史を様々な形で活用及び実践するという自体、公共歴史の特性になります。

この点は韓国の場合でもそのまま表れています。韓国で歴史大衆化の問題、その議論が注目されたきっかけは、「国史教科書の国定化問題（訳注：朴槿恵政権下で歴史教科書を検定制度から国定制度に変更しようとしたが社会的反発を受け失敗に終わった）」でしたが、これはとても悲劇的なことでした。レガシーメディアとニューメディアに関係なく人気を博した非専門的な歴史研究者の登場、いわゆる「インフルエンサー」という人々の登場が歴史を普及させたと同時に、歪曲することもありました。周辺国との歴史論争に乗じた国粹的な歴史学の人気も引き続き見られています。

韓国の学界でもこれに対して真剣に反応し始めました。韓国には代表的な歴史学関連団体が毎回開く歴史学大会があります。この歴史学大会の中で2017年度のテーマが「歴史消費の時代、大衆と歴史学」だったという事実は、今韓国の歴史学界で公共歴史もしくは歴史と大衆との関係に示されている関心の大きさを証明します。韓国の歴史学界が刊行する主要かつ人気の学術誌の一つ『歴史批評』でも特集されました（「韓国における公共歴史の現状と実践の問題（한국 공공역사의 현황과 실천의 문제들）」）。

このような公共歴史の展開が学問としての歴史学に及ぼす影響は少なくありません。国によって程度の差こそあれ、歴史学が権威を失いつつあります。そして、大学の歴史関連学科の卒業生の就職難は恐らく共通しているようです。「公共歴史」はこのような状況を打開するための対策になることもあれば、その半面、歴史学者たちの危機を加速化し得る、「両刃の剣」を意味します。歴史研究者たちは「近代歴史学（modern history）」が、今のポストモダン・ヒストリーへの一つの対抗としてモダン・ヒストリーになるわけですが、そこで強調されてきたように、歴史研究者にしか担えない役割とこなさなければならない任務があります。今日の歴史学者もまさに近代歴史学者のように証拠を探しながら任務を遂行すべきだと私は信じています。

と同時に、我々はアジアで公共歴史学が目指すべき方向についてもう少し考えなければなりません。本日、真剣に行われたオンラインでの議論を通じて、一気に問題は解決できていません。公共歴史学の目指すべき方向に関しては、劉

先生も問題提起の中でおっしゃいました。ところが、今日の公共歴史において「公共に関する研究」が重要と考えられますが、その研究は概ね二つの方向へとつながっているようです。一つは、大衆そのものに焦点を当て、大衆が歴史への消費もしくは参加を通じて生産する方法を研究する流れです。もう一つは、公共領域に焦点を当て、制度、歴史の大衆的形態、過去との参加がどのように歴史的知識を生産するかを研究する流れです。

最近の国際的な研究動向は、前者が非常に弱体化して、後者に集中する様相を呈しています。しかし、公共歴史家は大衆の歴史的意識がどのように形成されるかに注目するとともに、大衆が歴史の知識を生産、消費、そして交渉することを可能にするもしくは制限する要素を決して看過してはいけません。一部の公共歴史で提示されているポストモダンな関心以外にもモダン・ヒストリー、つまり近代歴史学が有していた強みと歴史的機能を共に活かせる方法も引き続き模索した方が良いと思います。

私は国史たちの対話に第1回目から参加させていただいています。第1回から参加するうちに、若手の研究者の方々がいつの間にか、学界の主要な研究者になりつつあります。第4回のフィリピンでの対話以来、オンラインに参加し続けてきた研究者間のコミュニケーションは今固い友情の形として続いています。こういう状況を見ると、第1回目の対話から築いてきた対話の経験がそろそろ実を結び、三国に影響力を発揮できるようになってきているのではと思います。三国の研究者たちは機械的に集めたのでは到達できない地点に7回の対話を通じて到達できたのです。

本日のテーマは研究者らの義務を改めて気づかせてくれました。これからが大変でしょうが、力を入れて良い影響力を三国に与えてくれたらと思います。何よりも本日の発表を通じて公共歴史学について真摯に省察し、その方向性について共に考えてくださった参加者の皆様の努力に感謝申し上げます。オンラインでアジアにおける公共歴史学の概念がより明確に整理できました。公共歴史学の発展のため、より議論へ拍車をかける機会になったと思います。本日の参加者の方々に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

講師略歴

■ 韓 成 敏 / HAN Sungmin

1991年東国大学史学科学士。1998年東国大学大学院史学科修士。2016年東国大学大学院史学科博士課程卒業。文学博士。現在、高麗大学アジア問題研究院研究教授。専門分野は韓国近代史、近代韓日関係史、韓国近代外交史。近代以降、異なる道を歩んできた韓国と日本に対する問題意識から、韓日間の歴史問題の起源としての近代韓日関係史を綿密に調査研究している。

主な著作：『日本の‘韓国併合’過程 研究』（京仁文化社、2021）、「제2회 헤이그 萬國平和會議 特使 에 대한 日本의 對應」（『韓日關係史研究』51, 2015）、「亡命者 金玉均에 대한 日本政府의 處遇와 朝鮮政策(1884-1890)」（『歴史と現實』109, 2018）、「1907년 體制成立過程에서 日本의 韓國政策과 韓國社會의 對應」（『日本歴史研究』49, 2019）など。

金キョンテ

全南大学

[原文は韓国語、翻訳：尹在彦（立教大学）]

「第7回日本・中国・韓国における国史たちの対話」は、2022年8月6日にオンラインで開催された。テーマは「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」だった。歴史大衆化と「パブリック・ヒストリー」は国籍や専攻分野を飛び越えて対話のできるテーマであり、実際に時間が不足するほど熱を帯びた議論が交わされた。

第1セッションは李恩民先生（桜美林大学）の司会で進められた。彭浩先生（大阪公立大学）による開催の趣旨に続き、韓成敏先生（高麗大学）の問題提起があった。2019年にフィリピンで開かれた「第4回国史たちの対話」以来、情熱的に参加し鋭いご意見を頂いている韓先生の問題提起は時宜を得たものだった。その題目は「『歴史の大衆化』について話しましょう」。韓先生は普段から同僚の学者たちと共に同テーマについて深く考えており、今回の問題提起はそういった議論をまとめたものでもあった。

韓国の事例を歴史学の危機と歴史学者の危機、そして現実的問題（歴史学科の存続と卒業生の就職）といった三つの部分に分けて紹介した。要するに、時代の変化に応じて歴史学も変わり対応すべきということだった。歴史学者による歴史への独占の時代が終わったことを認め、変化しなければならないということだ。

韓先生はその対応策の一つとして「パブリック・ヒストリー」を紹介した。この概念や手法はまだ日中韓の3カ国で理論として定着しているわけではないが、その取り組みは早ければ早いほど良いという。「歴史学が自らの存在意義を証明すべき時期」という提言も同時になされた。

これに対し、指定討論者の日中韓の研究者である中国の鄭潔西先生（温州大学）、日本の村和明先生（東京大学）、韓国の沈哲基先生（延世大学）たちは、慎重ながらも積極的に意見を提示した。各者から似てはいるが、それぞれ異なる考えを示していただいた点は興味深かった。国ごとに、例えば歴史家が譲ってはいけないことなどの「歴史学界の権威」や、これからの役割などについてある程度違いも見られた。特に中国の場合、大衆の歴史議論への参加が活発で、これを肯定的に捉える観点があるように思った。にもかかわらず、ニューメディアと共に非専門的な歴史家たちが大衆の求めるところに便乗する場面と、歴史学が職業として安定性を失っている現状（就職の困難さ）は共通しているようだった。これは世界的な問題なのか。「パブリック・ヒストリー」というオルタナティブを認め、そのためのスペースが用意されるべきという意見もあった。また、3カ国で

共通して「パブリック・ヒストリー」の範囲を定め、概念を定義する必要性も呼びかけられた。

第2セッションは南基正先生（ソウル大学）の司会。まず劉傑先生（早稲田大学）の論点整理があった。歴史が政治と関わって、道具になってしまう場合に注意しなければならない点、一般の歴史家が克服すべき問題、歴史家が対応しきれない問題について触れられた。

自由討論では次のような議論があった。歴史的経験から始まる活発な「大衆の歴史」の様子、メディアと急激に変化する世界という現状を指摘した毛立坤先生（南開大学）。国家が管理してきた歴史に対する挑戦は常にあったから、歴史の大衆化は必然的と指摘、人々皆が自ら歴史家になりたいというのがパブリック・ヒストリーの核心であり、むしろ、機会であり多様性を認め包容力を持つ態度が重要である。しかし、もちろん、度が過ぎた商業化、政治的介入、歴史修正主義などの「耐えられないこと」は拒否すべきであるという金滸先生（ソウル大学）。また、塩出浩之先生（京都大学）や佐藤雄基先生（立教大学）は、前向きに大衆の歴史を受け止め、機会と捉えるべきで、大衆の歴史の効果性もあると指摘した。

比較的楽観的もしくは歴史学者の積極的な変化を促すこうした見解以外にも様々な意見があった。平山昇先生（神奈川大学）は、この現象が近代日本において歴史的に存在していた事実を思い出すべきということを強調した。村先生は危機と機会の両立には賛成だが、歴史専門家が専門家以外の人々と話を進められるかについては懐疑的な見解を示した。いわゆる疑似歴史学の最も大きな危険性は社会を分断させることで、例えば、「敵を作り出すこと」という指摘は重要だ。二つの食い違った議論ではなく、実際には歴史学者として似たような悩みを抱えつつ、やや違うオルタナティブを考えているように感じた。歴史大衆化は歴史学者の皆が考え抜く問題であり、はねのけて勝利するような種類の問題ではないと考える。

第3セッションは再び李恩民先生の司会で、三谷博先生（東京大学名誉教授）の総括及び趙珖先生（高麗大学名誉教授）の閉会挨拶で幕を閉じた。両先生ともに「若き」研究者たちの悩みに理解を示し、ねぎらいの言葉も頂いた。

今回の「対話」は肩の荷を少し下ろして、自由に話をしようというのがねらいの一つだっただろう。しかし、対話をしてみたら、同じ悩みを抱えている研究者らの話を伺って、嬉しい気持ちになる一方で、重荷を担わされた気がした。これからの歴史学者の役割はどうなるか。今回の対話で我々は「大衆」という用語を用いたが、大衆もひとくくりにして捉えてはいけないうら。大衆の中には善悪が明確に分けられた感動的な歴史物語が好きな人、特定分野に関して専門の研究者よりマニアックな興味関心を持っている人、暗記中心の歴史教育により興味を失った人もいるだろう。もしくは自分が知っていた歴史は全て偽物だと、いわゆる歴史修正主義に傾く人もいるかもしれない。一人の歴史研究者が全ての大衆を満足させることはできないだろうが、このように多様な大衆の前で歴史専門家として果たすべき役割は確かにあると思う。

筆者は大衆向けの講演と学術会議の中間に位置付けられるような催し・イベント

トにたまに足を運ぶ。しかし、そうした催しが、面白くなく、感動的でもないという話を聞くことがある。歴史ドラマのような感動的な講演を求めている方々だったのだ。最初は納得できないところもあったが、今はそうは思わないようにしている。時にそれらの方々の興味に合わせて面白い話をいくつか用意することもある。

最近の一つの職業にも多様な役割が求められているように感じる。これからは歴史研究者も良い学術論文を書く基本的な任務以外に、大衆が少なくとも間違っただけに引き込まれないように方向を案内する役割を担わなければならないと思う。もちろん大衆が受け入れられる言語と形式で。面白くても間違っただけであればそれを直すべきだろうし、歴史マニアが看過しがちな歴史的な洞察力を提示すべきだ。大衆向けの書籍や外国の良い書籍を翻訳する作業、多様なメディアを用い、正確な歴史を教えること等が具体的な方法になるだろう。そういった仕事を学者の役割ではないとして無視してはならないし、ひるんでもならないと思う。現代社会で大衆とのつながりは歴史研究者の義務だと思う。できること、すべきことは、しなければならない。化石のような学問に満足すると、そのような役割しか担うことができないだろう。

(金キョンテ「第7回国史たちの対話『歴史大衆化と東アジアの歴史学』報告」より転載)



■ 金キョンテ (キム・キョンテ) KIM Kyongtae

韓国浦項市生まれ。韓国史専攻。高麗大学韓国史学科博士課程中の2010年～2011年、東京大学大学院日本文化研究専攻（日本史学）外国人研究生。2014年高麗大学韓国史学科で博士号取得。韓国学中央研究院研究員、高麗大学人文力量強化事業団研究教授を経て、全南大学歴史教育科助教授。戦争の破壊的な本性と戦争が荒らした土地にも必ず生まれ育つ平和の歴史に関する持っている。主な著作：壬辰戦争期講和交渉研究（博士論文）、虚勢と妥協—壬辰倭乱をめぐる三国の協商—（東北亜歴史財団、2019）

第 7 回 国史たちの対話の可能性 「『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」 参加者リスト

	氏名 (アルファベット)	氏名 (日本語)	氏名 (韓国語)	氏名 (中国語)	所属 (日本語)
発表者					
1	Han Sungmin	韓 成敏	한 성민	韩 成敏	高麗大学
指定討論者					
2	Zheng Jiexi	鄭 潔西	정 제시	郑 洁西	温州大学
3	Sim Chulki	沈 哲基	심 철기	沈 哲基	延世大学
指定討論者／実行委員					
4	Mura Kazuaki	村 和明	무라 가즈아키	村 和明	東京大学
自由討論パネリスト					
5	Hirayama Noboru	平山 昇	히라야마 노보루	平山 升	神奈川大学
6	Kim Ho	金 滸	김 호	金 滸	ソウル大学
7	Mao Likun	毛 立坤	마오 리쿤	毛 立坤	南開大学
8	Sato Yuki	佐藤雄基	사토 유키	佐藤雄基	立教大学
自由討論パネリスト／実行委員					
9	Shiode Hiroyuki	塩出浩之	시오테 히로유키	盐出浩之	京都大学
10	Song Zhiyong	宋 志勇	송 지용	宋 志勇	南開大学
実行委員					
11	Chen Lu	陳 璐	첸 루	陈 璐	早稲田大学
12	Cho Kwang	趙 珧	조 광	赵 珧	高麗大学名誉教授
13	Chong Soonil	鄭 淳一	정 순일	郑 淳一	高麗大学
14	Kim Kyongtae	金 キョンテ	김 경태	金 囧泰	全南大学
15	Li Enmin	李 恩民	리 언민	李 恩民	桜美林大学
16	Liu Jie	劉 傑	류 지에	刘 杰	早稲田大学
17	Mitani Hiroshi	三谷 博	미타니 히로시	三谷 博	東京大学名誉教授
18	Nam Kijeong	南 基正	남 기정	南 基正	ソウル大学
19	Peng Hao	彭 浩	펑 하오	彭 浩	大阪公立大学
同時通訳					
20	Ding Li	丁 莉	정 리	丁 莉	北京大学
21	Song Gang	宋 剛	송 강	宋 剛	北京外国語大学
22	Lee Hyeri	李 ヘリ	이 헤리	李 惠利	韓国外国語大学
23	Ahn Younghee	安 ヨンヒ	안 영희	安 暎姫	韓国外国語大学
24	Jin Danshi	金 丹実	김 단실	金 丹实	通訳翻訳者 (フリーランス)
25	Piao Xian	朴 賢	박 현	朴 贤	京都大学
翻訳					
26	Hong Yongil	洪 龍日	홍 용일	洪 龙日	東京大学
27	Yu Ning	于 寧	유 닝	于 宁	東京大学
28	Yun Jae-un	尹 在彦	윤 재언	尹 在彦	立教大学
事務局					
29	Imanishi Junko	今西淳子	이마니시 준코	今西淳子	渥美財団
30	Tsunoda Eiichi	角田英一	쓰노다 에이이치	角田英一	渥美財団
31	Nagai Ayumi	長井亜弓	나가이 아유미	长井亚弓	渥美財団
32	Miyake Aya	三宅 綾	미야케 아야	三宅 綾	渥美財団

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. パート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行
- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉裕、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行

- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマダチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考-自由と市民社会をキーワードに-」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか-留学生-」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャンナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャンナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート44 第29回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行
- SGRA レポート45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本、中国、シンガポール～」 佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20 発行
- SGRA レポート46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10 発行
- SGRA レポート47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 論、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8 発行

- SGRA レポート 48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く—アジアの留学生と生活を共にした協会の50年」 工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15 発行
- SGRA レポート 49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」 東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30 発行
- SGRA レポート 50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」 平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25 発行
- SGRA レポート 51 第35回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」 大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15 発行
- SGRA レポート 52 第36回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21世紀の課題」 宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25 発行
- SGRA レポート 53 第4回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること〜TABLE FOR TWO〜」 近藤正晃 ジェームス 2010. 4. 30 発行
- SGRA レポート 54 第37回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：東アジアのエリート高校教育の現状と課題」 玄田有史 シム・チュンキャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10 発行
- SGRA レポート 55 第38回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ~東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル~」 木村建一、高 偉俊、Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15 発行
- SGRA レポート 56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」 第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」 高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」 高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10 発行
- SGRA レポート 57 第39回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」 井上まどか、ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島蘭 進、陳 継東 2011. 12. 30 発行
- SGRA レポート 58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」 平川 均 2011. 2. 15 発行
- SGRA レポート 59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録 「1300年前の東アジア地域交流」 朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10 発行
- SGRA レポート 60 第40回フォーラム講演録 「東アジアの少子高齢化問題と福祉」 田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30 発行
- SGRA レポート 61 第41回SGRAフォーラム講演録 「東アジア共同体の現状と展望」 恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18 発行
- SGRA レポート 62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「Sound Economy ~私がミナマタから学んだこと~」 柳田耕一 「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」 郭 偉 2012. 6. 15 発行
- SGRA レポート 64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録 「東アジア軍事同盟の課題と展望」 朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート 65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録 「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」 赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート 66 渥美奨学生の集い講演録 「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語） 沼田貞昭 2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート 67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録 「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」 平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行

- SGRA レポート 68 第7回SGRA チャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
(日本語・中国語・英語) 宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート 69 第45回SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へー東アジア海洋秩序の現状と展望ー」
村瀬信也、南基正、李成日、林泉忠、福原裕二、朴榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート 70 第46回SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート 71 第47回SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会ー福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理ー」 崔勝媛、島蘭 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート 72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート 73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRA フォーラム講演録「アジア経済のダイナミズムー
物流を中心に」 李 鎮奎、金 雄熙、榎原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート 74 第49回SGRA フォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート 75 第50回SGRA フォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらしー環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、齊藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート 76 第9回SGRA チャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年ー文化史からの再検討」
劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート 77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力ー共進化アーキテクチャ
の模索」 孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート 78 第51回SGRA フォーラム講演録「今、再び平和についてー平和のための東アジア知識人連帯を考
えるー」 南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均宮、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート 79 第52回SGRA フォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート 80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力ー新たなアジア型モデルの模索ー」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート 81 第56回SGRA フォーラム講演録「人を幸せにするロボットー人とロボットの共生社会をめざして第
2回ー」 稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート 82 第57回SGRA フォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性ー蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」 葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫栢、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート 83 第58回SGRA フォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一帯一路』の地政学」 朱建榮、李彦銘、朴榮
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行
- SGRA レポート 84 第11回SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」 塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート 85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建榮、文晔鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート 86 第59回SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17
世紀東アジアの国際関係ー戦乱から安定へー」 三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、
許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート 87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行

- SGRA レポート 88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート 89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? —不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート 90 第63回SGRA フォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東
アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川
真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 91 第13回SGRA-V カフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート 92 第13回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、
古市雅子、陳 龔 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀
繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート 94 第65回SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19
世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート 95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」
小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 栄濬、西野 純也
2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート 96 第66回SGRA フォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴
2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現
に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、
ダルウイッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート 98 第15回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生ん
だのか?—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート 99 第68回SGRA フォーラム講演録「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性
を探る—」ハンブルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸 2022. 11. 1 発行
- SGRA レポート 100 第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のKカルチャー——新韓流現象とその影響力」
小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ 2022. 11. 16 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel : 03-3943-7612 Email : sgra@aisf.or.jp) へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0101

第69回SGRAフォーラム

第7回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
「歴史大衆化」と東アジアの歴史学

編集・発行 (公財)渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>
電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2023年3月22日
発行責任者 今西淳子
印刷 (株)平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

日本・中国・韓国における 国史たちの対話の可能性 「歴史大衆化」と東アジアの歴史学

